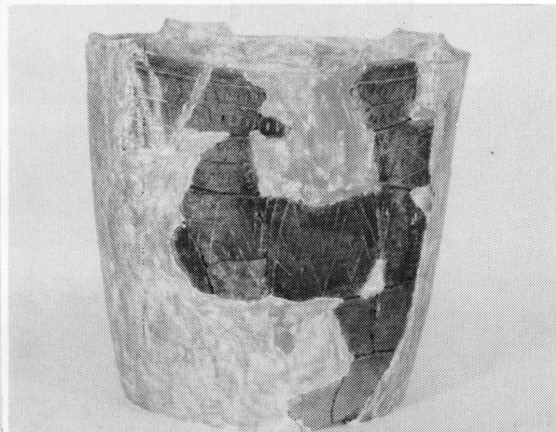
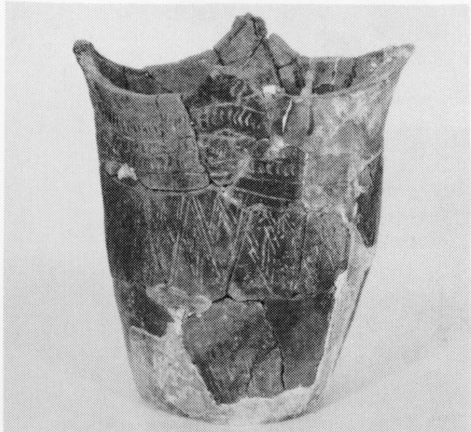
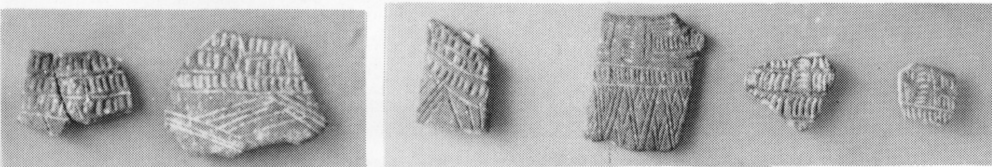
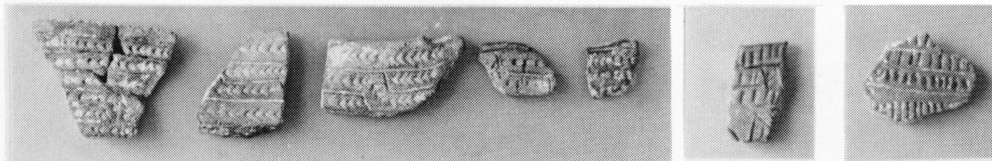


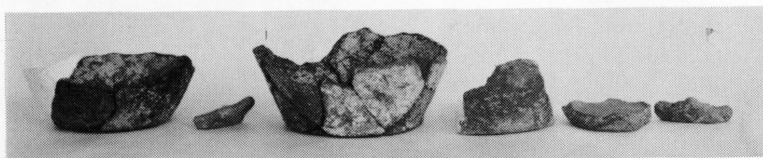
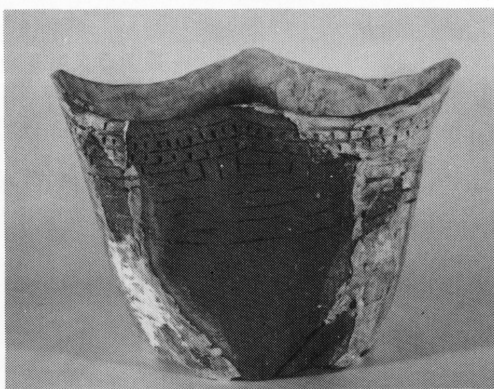
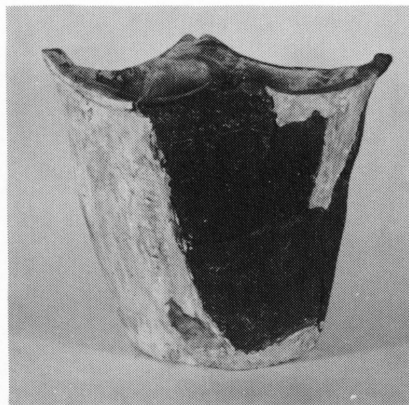
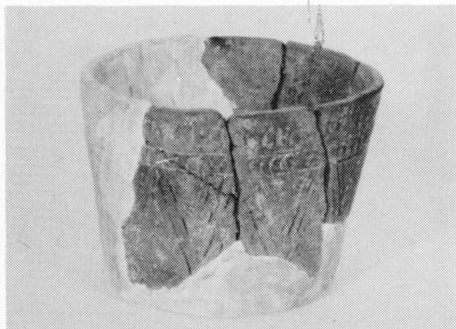
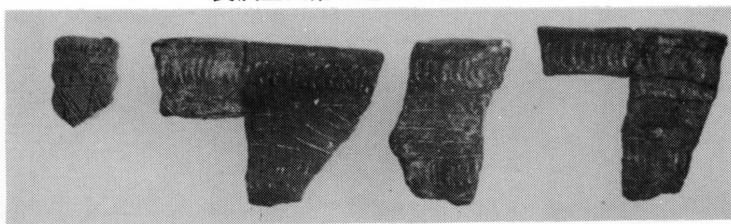


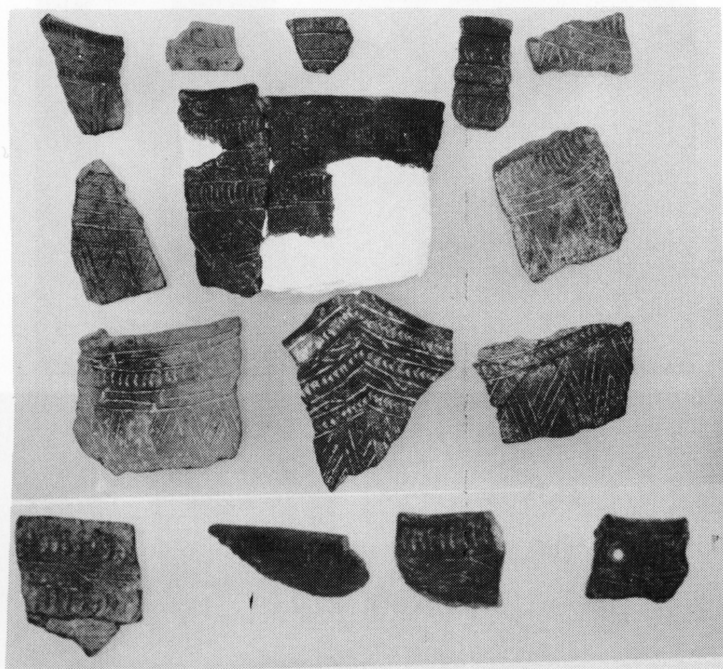
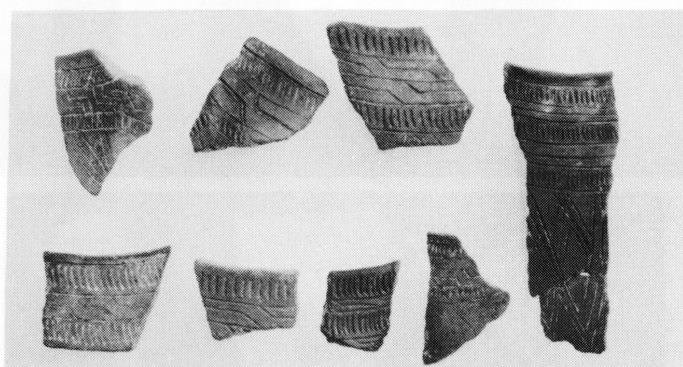
長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品出土状況



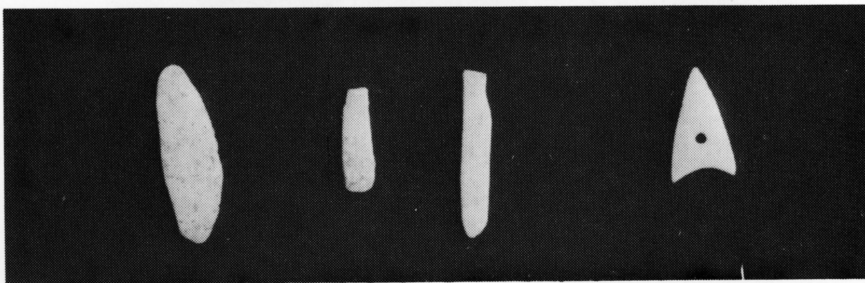
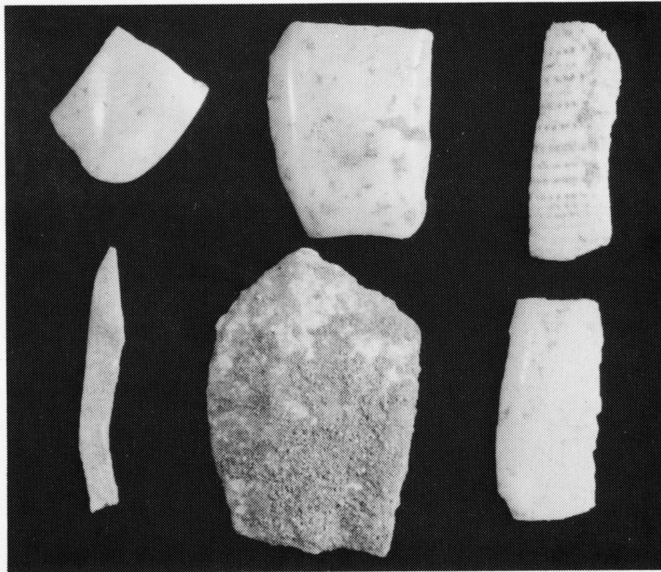
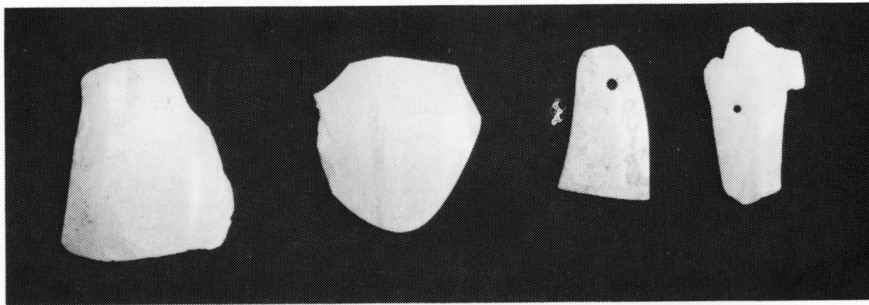
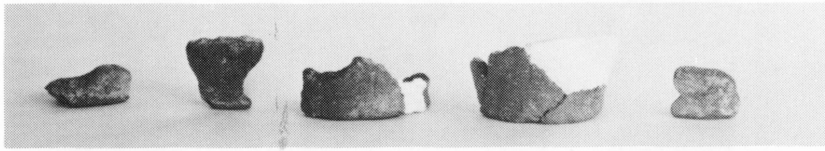
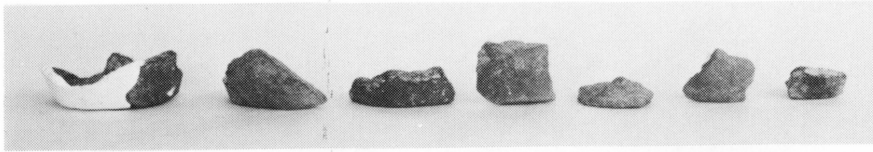
長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(1)

長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(2)

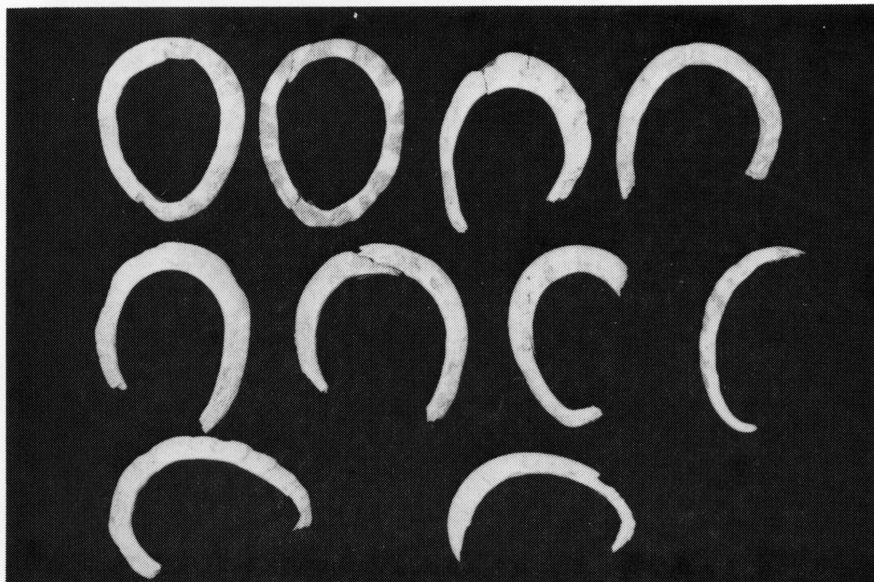
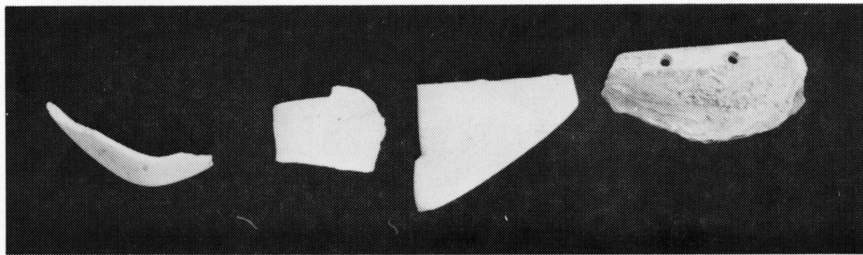
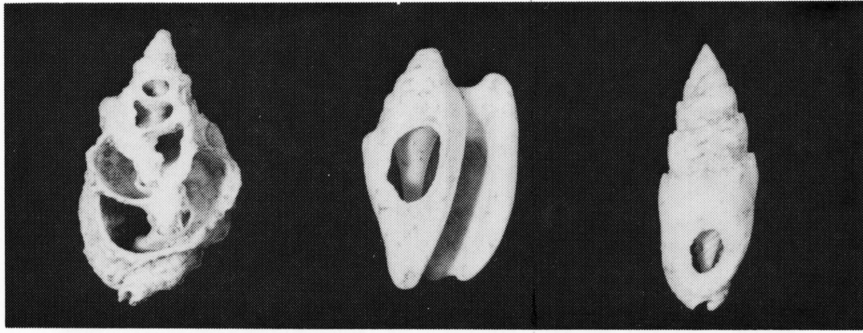


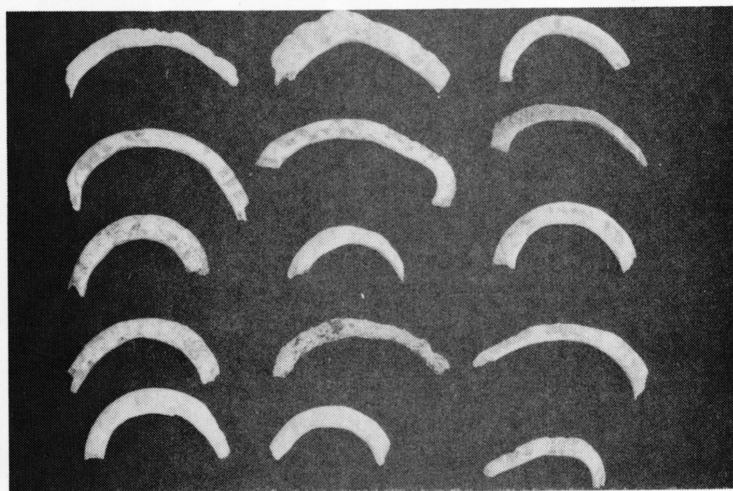
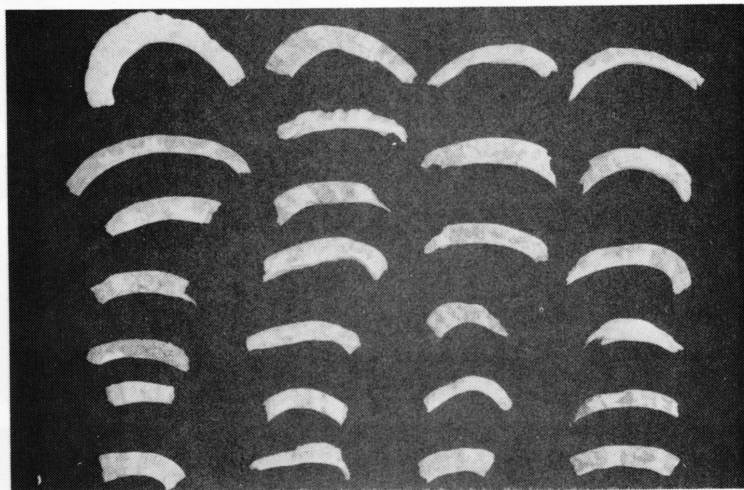
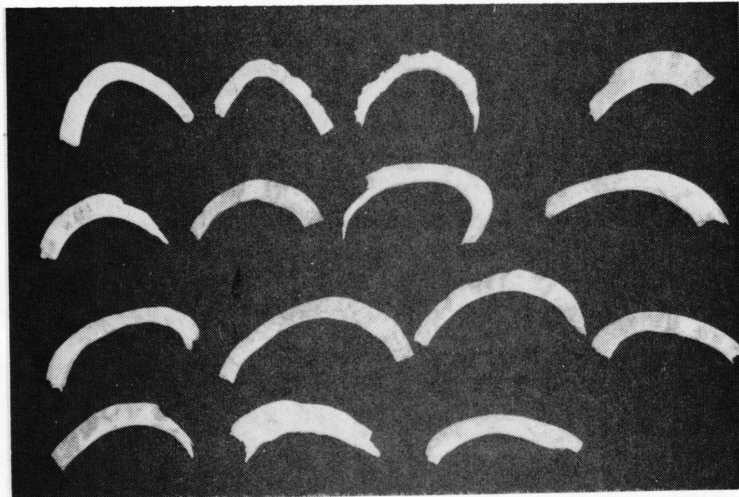


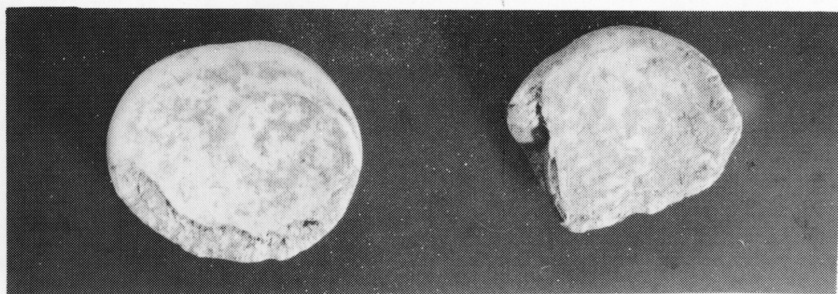
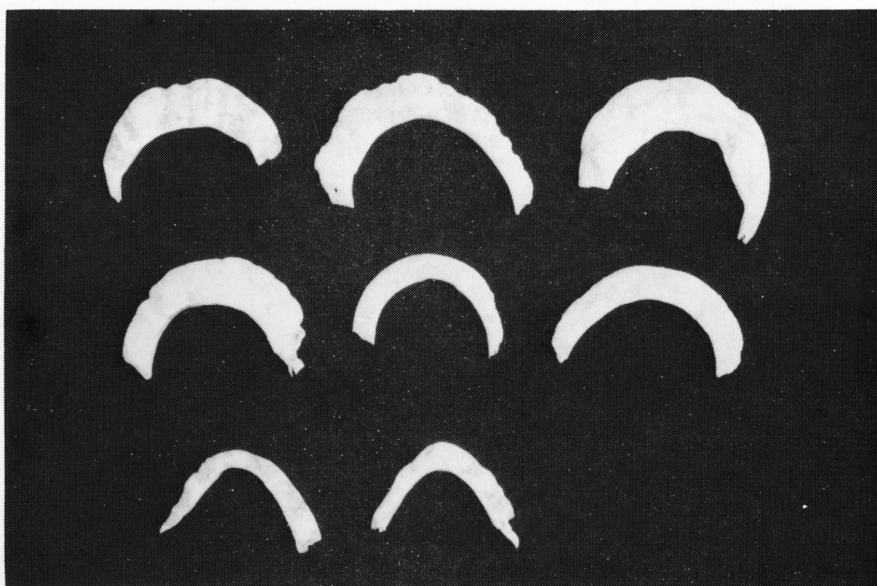
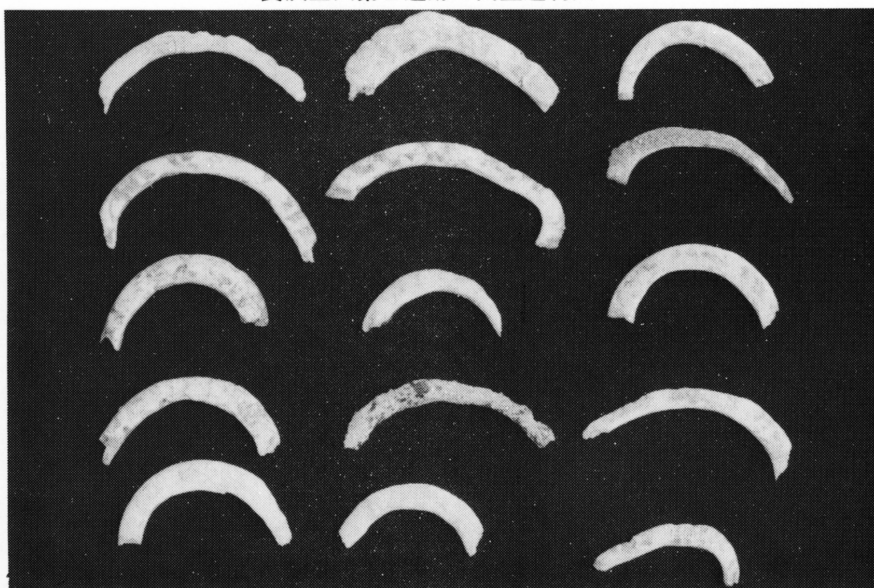
長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(4)



長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物(5)



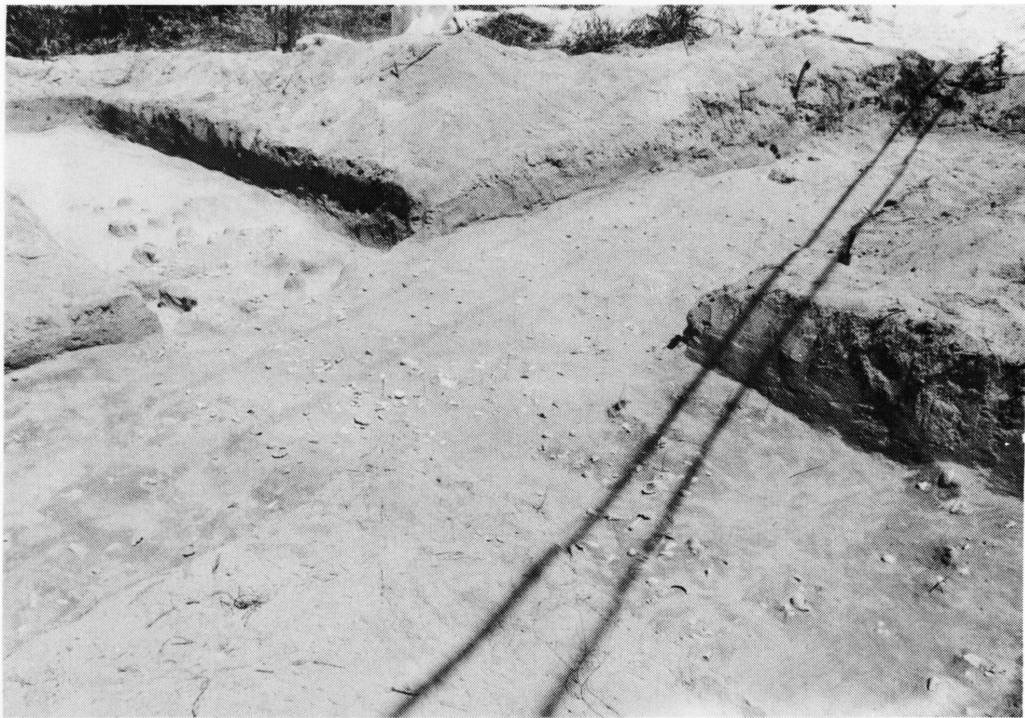




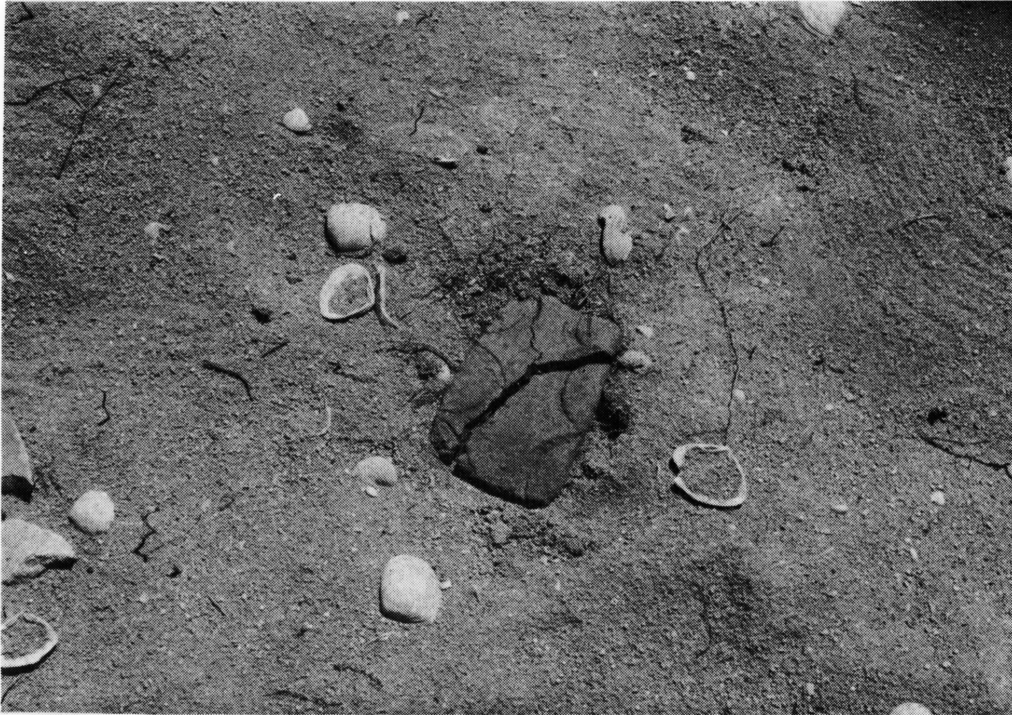


長浜金久第Ⅲ遺跡の近景

長浜金久第Ⅲ遺跡の出土状況

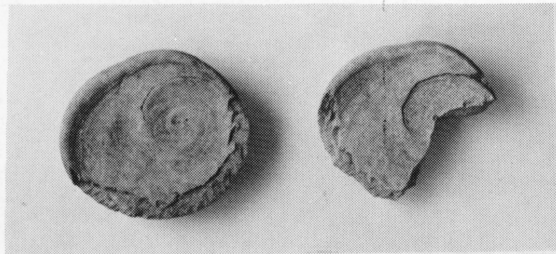
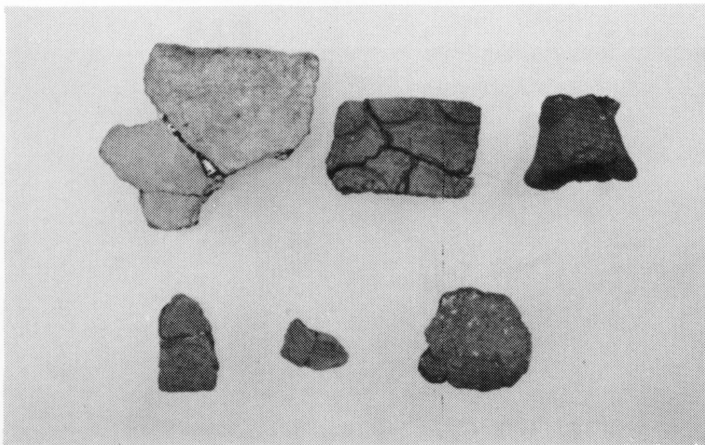


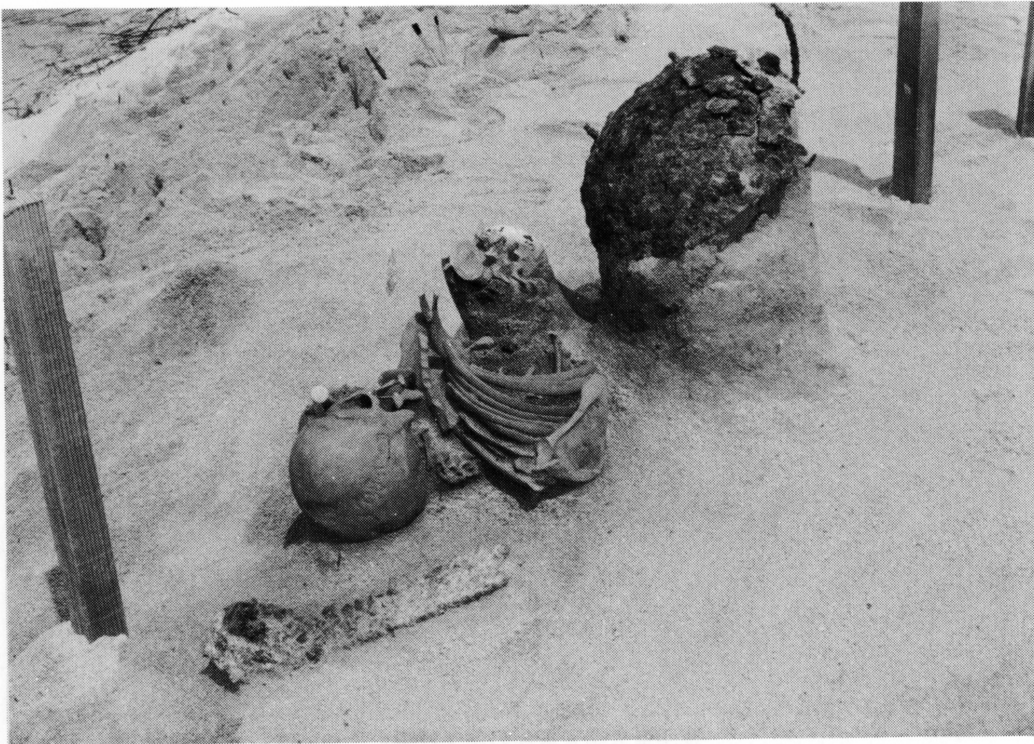




長浜金久第Ⅲ遺跡の出土状況

長浜金久第Ⅲ遺跡の出土遺物

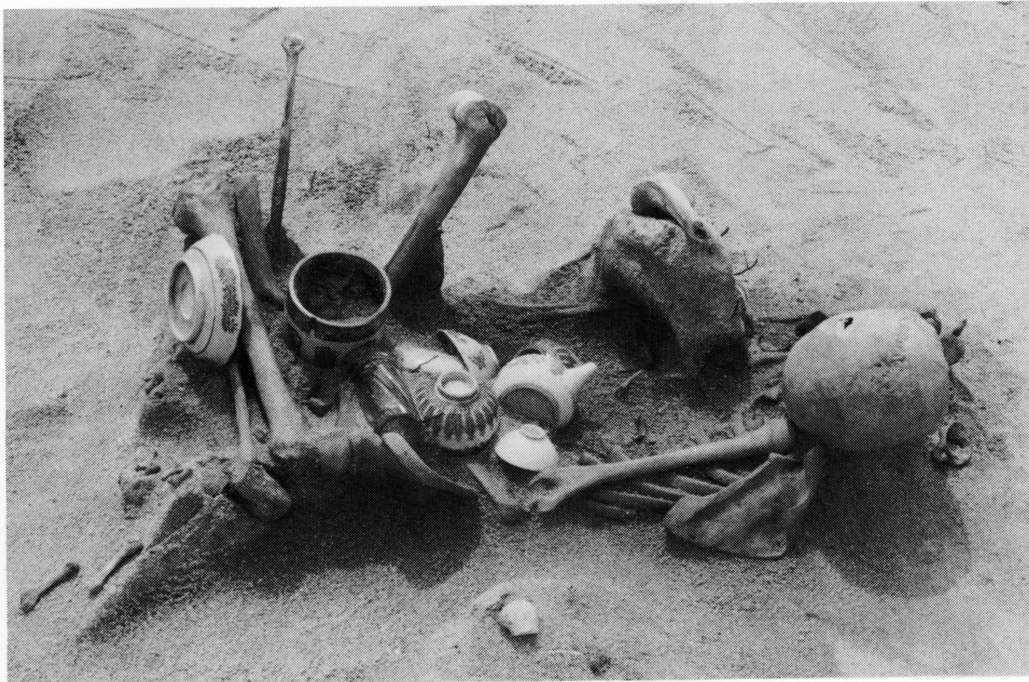




第 I 号

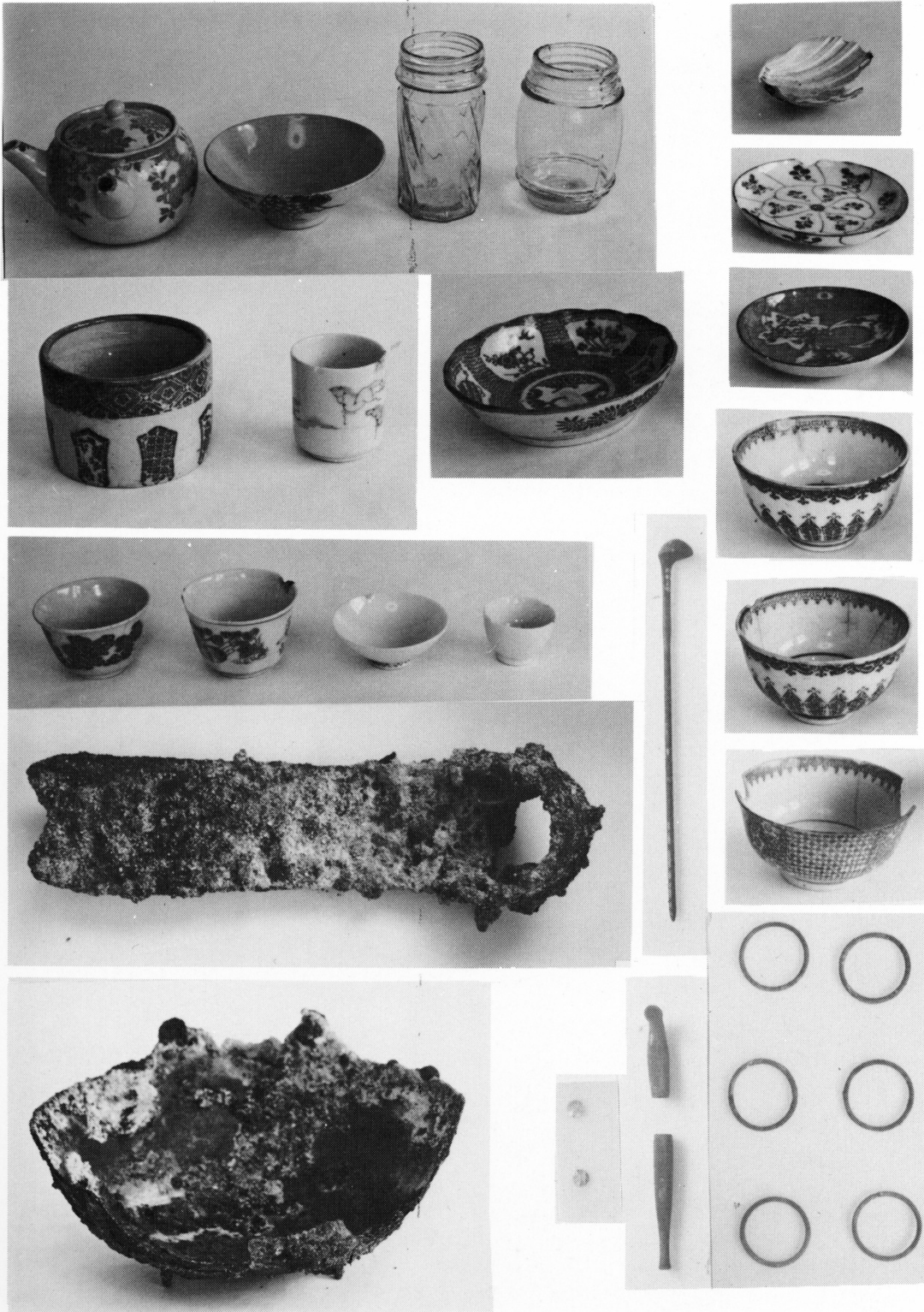
近世人骨出土状况

第 II 号



近世墓の副葬品

図版45



## 第 VI 章 自然遺物の同定について

### 1. 放射性炭素測定について

京都産業大学 山田 治

長浜金久遺跡の液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定結果報告

KSU-878	→ 930 ± 20 B.P.Y. No. 1	H-12区第13層出土 (層)	} 第 I 遺跡
KSU-879	→ 1120 ± 20 B.P.Y. No. 2	F-12区第19層出土 (下層)	
KSU-880	→ 690 ± 20 B.P.Y. No. 3	G-21区第 9層出土 (上層)	
KSU-881	→ 3100 ± 20 B.P.Y. No. 4	縄文後期 (嘉徳式土器の貝殻)	第 III 遺跡

#### Comment

KSU-878	730 ± 20 B.P.Y. ……絶対年代換算	AD1020~1050	平安時代
KSU-879	1120 ± 20 B.P.Y. ……絶対年代換算	AD 830~ 890	平安時代
KSU-880	690 ± 20 B.P.Y. ……絶体年代換算	AD1240~1290	鎌倉時代

## 2. 鹿児島県長浜金久第 I 遺跡出土の人骨

小片丘彦・川路則友・岡元満子・峰 和治・山本美代子  
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ)

### はじめに

奄美新空港建設に先立ち、鹿児島県教育委員会が昭和58・59年度にわたって発掘調査を行った鹿児島県大島郡笠利町長浜金久遺跡から、昭和59年5月に2体、9月に1体の人骨が出土した。現場は砂丘地で、前2体はほぼ全身が残っており、副葬品から判断して昭和初期に埋葬されたものと思われる。2体は南北に接近して出土し、北側の1体を現代人骨1号、南側のものを同2号とした。また9月に出土した1体は左上腕骨の骨体部分のみであるが、長浜金久第I遺跡第19層(8~9世紀)から出土したので、古代人骨とした。これら3体の人骨について計測および観察を行ったので報告する。なお人骨調査の機会を与えて下さった鹿児島県文化課に深く感謝する次第である。計測は Martin & Saller (1957), Howells (1973), 鈴木 (1963), Woo & Morant (1934) および Woo (1937) に従った。

### 所 見

#### 古代人骨(女性・成人)

成人の左上腕骨骨体部のみである。骨質はよく保存され、かつ漂白されている。上・下端を欠くので正確な全体像を知ることができないが、全長は非常に短く260mmを超えていないと推定される。可能な計測値は中央最大幅22mm, 中央最小幅13.5mm, 骨体最小周58mm, 中央周61mmで骨体断面示数は61.4である。すなわち、短く細く中央部が扁平な上腕骨であり、女性のものである可能性が強い。特徴的なことは筋付着部がよく発達していることである。ことに大結節稜が堤防状に長く強く隆起するほか、三角筋粗面も著しく発達し外側へ強く張り出している。内・外側縁は鋭い。以上の所見から本人骨は小柄な成人女性で、上腕を著しく使用する生活を営んでいたものと推定される。

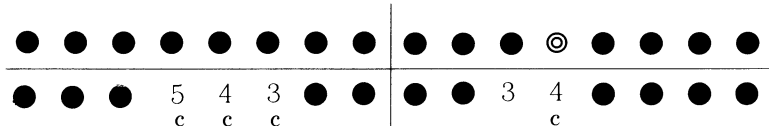
#### 現代人骨1号(女性・熟年)

本人骨は工事により下半身を攪乱され、主として上半身だけが埋葬体位を保っていた。頭位はほぼ北であり、頭部を下に、下肢帯を上にする形の屈位で埋葬されていたと思われるが、詳細は不明である。年齢および性別は熟年期の女性である。

#### 1. 頭 蓋

頭蓋に関する計測値を表1に示す。脳頭蓋では長幅示数が77.8で中頭型、長高示数が75.3で高頭型、幅高示数は96.8で中頭型を示す。顔面頭蓋では上顎骨歯槽突起の萎縮が著しく、顔高や上顔高などの計測は不能であるが、眼窩示数は80.0で中眼窩型、鼻示数は59.6で過広鼻型に

属する。鼻根部および顔面平坦度の計測値は表2の通りである。鼻根弯曲示数(89.5), 前頭突起水平傾斜角(97°)はともに大きく、鼻根部が扁平であることを示している。また前頭骨は平坦で(前頭骨平坦示数14.9), 頬骨の弯曲度は強くない(水平弯曲示数20.4)。三主縫合は内・外板ともに閉鎖は認められず、矢状縫合ではまだ鋸歯状を呈している。左右頭頂骨の矢状縁中央付近が前後に隆起しており、そのために矢状縫合の中央付近が溝状に凹んでいる。乳様突起は大きい粗雑でなく、外側への張り出しも少ない。下顎角の外反もない。外耳道骨瘤は認められない。歯列は次の通りである。



- ：生前脱落，歯槽完全閉鎖
- ◎：生前脱落，歯槽不完全閉鎖
- c：齶蝕

上顎歯はすべて生前脱落している。歯槽萎縮が著しく、萎縮は歯槽突起基部にまで及んでいる。下顎においても歯槽部の萎縮は顕著で、ほとんどの歯が歯根を半分以上露出させている。咬耗は3|3がMartinの2度で、4|4が同3度である。なお4|4は近心側へ約45°捻転している。齶蝕は5 4 3 | 4に認められ、ことに5 4 | は歯冠を失うまでに進行している。

## 2. 体幹骨

椎骨、胸骨および肋骨のすべてが残っている。下位腰椎(L<sub>3</sub>～L<sub>5</sub>)の椎体縁に骨棘形成が見られ、上・下関節突起に凹凸不平な骨増殖が認められる。胸骨柄と体の癒合は完了している。

## 3. 体肢骨

ほぼ完全な形で残っている。計測値を表3に示す。全般にかなり長い、骨体は細く、骨頭や関節面が小さい。寛骨の大坐骨切痕は広く、恥骨結合面には平行隆線は見られず、骨表面が幾分陥凹しており、ところどころに小孔がある。大腿骨骨体上部は扁平で(上骨体断面示数 右77.6, 左79.4), 粗線の発達が良い、骨体に柱状形成の傾向が見られる(骨体中央断面示数 右106.3, 左112.8)。右大腿骨最大長から算出した推定身長は154.0cm(Pearson)である。上肢骨および大腿骨には病的変化は見られないが、脛・腓骨には左右とも広範な骨増殖が認められる。骨増殖は左右ほぼ対称的に起こっており、脛骨ではヒラメ筋線付近、骨間縁、腓骨切痕周辺に著しく、腓骨では骨間縁に沿う部位および外果関節面上方部に強く現れている。いずれも表面粗雑な骨肥厚もしくは顆粒状の突起の集合である。膝・足関節の関節面には変化は認められない。足骨は取り上げの際に欠けた部分が多いが、残っている左第4・右第3・右第4中足

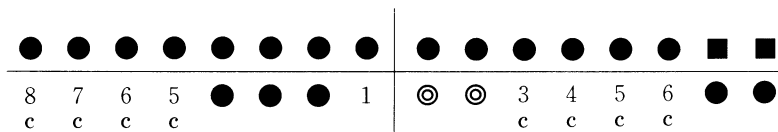
骨の骨頭に著しい萎縮が見られる。脛・腓骨の骨増殖と中足骨の萎縮とは関連するものと思われ、慢性炎症に起因する一連の骨変化が想定される。

### 現代人骨 2号 (男性・壮年)

頭を北へ向けた仰臥伸展位をとり下肢を幾分曲げて埋葬されたほぼ完全な1体で、壮年期の男性である。

#### 1. 頭蓋

頭蓋に関する計測値を表1に示す。脳頭蓋では長幅示数75.4で長頭に近い中頭型、長高示数77.1で高頭型、幅高示数102.2で尖頭型を示す。顔面頭蓋では1号と同様に上顎骨歯槽突起の萎縮が著しいために顔高や上顔高などの計測が不能であるが、眼窩示数は73.8で低眼窩型を、鼻示数は49.0で中鼻型を示している。鼻根部および顔面平坦度の計測値を表2に示したが、鼻根弯曲示数90.9、前頭突起水平傾斜角94.5°で鼻根部は扁平であり、前頭骨は平坦で(前頭骨平坦示数15.8)、頬骨の弯曲度は幾分強い(水平弯曲示数23.3)。乳様突起は大きく表面粗雑であるが、側方への張り出しはない。三主縫合は内・外板ともに閉鎖は認められず、ほとんどが鋸歯状を呈している。床状突起間骨橋の存在が認められる。外耳道骨瘤はない。梨状口縁は全周にわたって骨萎縮があり、鈍縁化している。下顎骨は歯槽部の萎縮が顕著で、植立する歯はいずれも歯根の2/3が露出している。下顎角はやや外反する。歯列は次の通りである。



■：歯槽とともに欠損

残存歯の咬耗は8 7 | 4 5がMartinの1度であるほかはすべて同2度である。大部分の残存歯に齶蝕が見られ、歯石の沈着が著しい。

#### 2. 体幹骨

椎骨、胸骨および肋骨のすべてが残っている。第3・第4腰椎に脊椎分離症が見られ、第4・第5腰椎の椎体縁には顕著な骨棘形成が認められる。仙骨には脊椎披裂がある。

#### 3. 体肢骨

計測値を表3に示す。全般に1号に比べて、やや短いがかかなり太く、骨頭および関節面が大きい。寛骨の大坐骨切痕は狭く、恥骨結合面には平行隆線が少し残っており、表面はかなり粗雑である。大腿骨骨体上部はわずかに扁平で(上骨体断面示数 右84.4, 左83.9)、骨体に柱状形成は認められない。脛骨は軽度の扁平性を示す(脛示数 右64.7, 左64.7)。右大腿骨最大長から算出した推定身長は157.1cm (Pearson) である。左右尺骨の下部1/3に対称的な骨

病変がある。炎症に起因すると思われる骨肥厚で、左尺骨では肥厚部中央に多孔性の陥凹が認められる。他の体肢骨には同様の病変は見られない。前記梨状口縁の変化と尺骨の病変とは一連の疾患の可能性もあるが、明白ではない。

### 考 察

南西諸島における近世～現代人骨の頭蓋計測の資料には喜界島(中野, 1958), 与路島(菊池, 1959), 徳之島(岩井, 1959), 与論島(大山, 1965) および宮古島(池田, 1974) 各島の風葬人骨を対象にしたものがある。今回出土した現代人骨2体についての主要頭蓋計測値および示数を近隣諸島のそれらと比較したのが表4(女性)と表5(男性)である。

まず、1号(女性)の最大長は喜界島、徳之島および与論島に類似して長く、最大幅も

表1 頭蓋計測値

Martin's No	計測項目	現代1号	現代2号
		(女・熟)	(男・壮)
1	頭蓋最大長	178	183
5	頭蓋基底長	97	105
8	頭蓋最大幅	138.5	138
9	最小前頭幅	96	92
11	両耳幅	130.5	124
17	Ba-Br高	134	141
25	正中矢状弧長	365.5	377
26	正中矢状前頭弧長	133	132
27	正中矢状頭頂弧長	126	133
28	正中矢状後頭弧長	106.5	112
29	正中矢状前頭弦長	115	116
30	正中矢状頭頂弦長	114	118
31	正中矢状後頭弦長	94	96
45	頬骨弓幅	129	129
46	中顔幅	97	—
51	眼窩幅Ⅰ	42.5	42
51a	眼窩幅Ⅱ	39	40
52	眼窩高	34	31
54	鼻幅	28	(25)
55	鼻高	47	51
H	Vertex Rad.	125	104
H	Nasion Rad.	89	69
65	下顎頭間幅	121	116
66	下顎角幅	88	98
68(1)	下顎骨長	100	110
69	オトガイ高	—	(28)
69(3)	下顎体厚	10	11
70a	下顎頭高	47.5	56
71a	最小下顎枝幅	29.5	32
8/1	長幅示数	77.8	75.4
17/1	長高示数	75.3	77.1
17/8	幅高示数	96.8	102.2
52/51	眼窩示数	80.0	73.8
54/55	鼻示数	59.6	49.0

表2 鼻根部および顔面平坦度計測値

計測項目	現代1号 現代2号	
	女性	男性
a 前頭骨弦	94	95
b 垂線高	14	15
c 頬骨水平弧	60	68
d 頬骨水平弦	54	60
e 水平弧高	11	14
f 頬骨垂直弧	48	51
g 頬骨垂直弦	47	48
h 前眼窩間幅	17	20
i 鼻根横弧長	19	22
j 鼻骨最小幅	8	8
k 前頭突起水平傾斜角	97°	94.5°
l 前頭突起上幅(左)	8	9
b/a 前頭骨平坦示数	14.9	15.8
e/d 水平弯曲示数	20.4	23.3
h/i 鼻根弯曲示数	89.5	90.9



表3 四肢骨計測値

Martin's No	計測項目	現代1号(女・熟)		現代2号(男・壮)	
		右	左	右	左
鎖骨					
1	最大長	143	149	157	158
4	垂直径	8	8	11	10
5	矢状径	10	11.5	12.5	12
6	中央周	36	33	37	38
上腕骨					
1	最大長	303	297	291	287
2	全長	299	294	284	280
3	上端幅	42	41	47	47
3(1)	横上径	46	44	50	50
4	下端幅	55	55	56	56
5	中央最大幅	18.5	18	23	22
6	中央最小幅	16	15	17.5	17
6b	骨体中央横径	17.5	18	22	21
6c	骨体中央矢状径	17	17	20	20
7	骨体最小周	55	54	61	59
7a	中央周	56	56	65	64
8	頭周	(120)	115	132	133
9	頭最大横径	—	36	41	42
10	頭最大矢状径	39	37	45	45
11	滑車幅	21	20.5	26	26
12	小頭幅	15	15	18	17
6/5	骨体断面示数	86.5	83.3	76.1	77.3
橈骨					
1	最大長	228	223	228	225
1a	頭粗面間距離	30	28	30	29
2	生理的長	217	213	211	209
3	最小周	36	36	41	40
4	骨体横径	15	15	16	16
4a	骨体中央横径	13	13	11	12
4(1)	頭横径	20	19.5	24	24
4(2)	頸横径	11.5	11.5	14	15
5	骨体矢状径	10	10	12	12
5a	骨体矢状径	10	10	12	12
5(1)	頭矢状径	20	20	(26)	26
5(2)	頸矢状径	12	12	15	14
5(3)	頭周	62	61	(79)	80
5(4)	頸周	39	39	46	47
5(5)	骨体中央周	38	37	41	40
5(6)	下端幅	31	30	34	33
5/4	骨体断面示数	66.7	66.7	75.0	75.0

表3 (つづき)

Martin's No	計測項目	現代1号(女・熟)		現代2号(男・壮)	
		右	左	右	左
尺骨					
1	最大長	243	240	242	240
2	生理的長	219	215	213	214
2(1)	肘頭尺骨頭長	241	238	237	238
3	尺骨周	33	34	38	39
5	肘頭頂高	(1.5)	(1.5)	(2)	(2)
5(1)	上腕節面高	33	34	35	37
5(2)	上腕関節面高	25	25	27	28
6	肘頭幅	24	24	24	25
6(1)	上尺骨幅	26	24.5	32	(33)
7	肘頭深	21	21	23	22
7(1)	肘頭鈎状突起間距離	21	21	25	25
8	肘頭高	18	18	20	21
9	鈎状突起橈骨側関節 半面の前幅	8	8	6	6
10	鈎状突起橈骨側関節 半面の後幅	10	11	11	11
11	尺骨前後径	13	13	12	12
12	尺骨横径	15.5	14.5	17	17
13	尺骨上横径	16	17	23	23
14	尺骨上前後径	24	24	25	25
11/12	骨体断面示数	83.9	89.7	70.6	70.6
13/14	扁平示数	66.7	70.8	92.0	92.0
大腿骨					
1	最大長	417	418	403	402
2	自然位の大腿骨全長	410	413	401	400
3	最大転子長	409	408	391	391
4	自然位の転子長	392	394	383	382
5	骨幹長	342	341	323	333
6	骨体中央矢状径	25.5	26.5	25	26
7	骨体中央横径	24	23.5	26	27
8	骨体中央周	78	79	81	83
9	骨体上横径	33.5	34	32	31
10	骨体上矢状径	26	27	27	26
13	大腿骨上幅	87	89	89	89
15	頸垂直径	26	28	32	32
16	頸矢状径	20	20.5	26	25
17	頸周	84	85	100	99
18	頭垂直径	39	40	43	45
19	頭横径	40	40.5	46	45
20	頭周	126	127	144	142

表3 (つづき)

Martin's No.	計測項目	現代1号(女・熟)		現代2号(男・壮)	
		右	左	右	左
21	上顎幅	71	71	81	80
22	外顎厚	57	57	60	61
23	外顎最大長	57	57	61	61
24	内顎最大長	55	56	64	65
24a	内顎投影的深	52	54	60	61
25	外顎後高	31.5	31	35	34
26	内顎後高	33.5	31	36	35
6/7	骨体中央断面示数	106.3	112.8	96.2	96.3
10/9	上骨体断面示数	77.6	79.4	84.4	83.9
膝蓋骨					
1	最大長	36	38	40	39
2	最大幅	38	40	41	41
3	最大厚	18	18.5	19	19
4	関節面高	30	30	31	31
5	内側関節面幅	19	20	19	18
6	外側関節面幅	24.5	25	27	27
脛骨					
1	脛骨全長	334	338	340	340
1a	最大長	340	343	347	347
1b	脛骨長	332	334	337	337
3	最大上端幅	68	69	77	77
6	最大下端幅	47	49	49	48
7	下端矢状径	31	32	37	37
8	中央最大径	25.5	25	29	29
8a	栄養孔位最大径	—	—	34	34
9	中央横径	24	22	20	20
9a	栄養孔位横径	—	—	22	22
10	骨体周	78	75	78	78
10a	栄養孔位周	—	—	89	89
10b	骨体最小周	—	—	72	72
9a/8a	脛示数	—	—	64.7	64.7
腓骨					
1	最大長	331	333	331	332
2	中央最大径	—	—	17	16
3	中央最小径	—	—	13	10
4	中央周	—	—	47	44
4(1)	上端幅	27	27	24	23
4(2)	下端幅	25	25	24	24

南西諸島人骨の中では大きいほうである。

Ba—Br 高は他島人と変わらない。長幅示数、長高示数、幅高示数、眼窩示数はいずれも他島人とそれほど異なっておらず、わずかに、鼻幅が広いために鼻示数で広鼻の傾向が他島人よりも顕著になっていることが特徴として挙げられる。2号(男性)の最大長は他島人に類似するが、最大幅は喜界島とともに南西諸島人の中では比較的小さい。またBa—Br 高は他島人よりも大きい。長幅示数と幅高示数は喜界島に、長高示数は与路島に最も近い値が得られているが、その他の比較群との相違もそれほど顕著ではない。眼窩示数は他島人(中眼窩型)とやや異なり、典型的な低眼窩型を示している。

試みに主要頭蓋計測値を用いて、長浜金久現代人骨と他の南西諸島人骨および現代鹿児島県本土人骨(小片・川路、未発表)との間でのPenroseの形態距離(Constandse-Westermann, 1972)を算出したのが、表6(女性, 18項目)と表7(男性, 17項目)である。1号(女性)では徳之島に最も近く、与路島および鹿児島とはやや離れているが、数値としてはどの比較群ともそれほど大きな差があると思えない。2号(男性)についても同様と思われる。

鼻根部および顔面平坦度の計測値を徳之島風葬人骨(川路・小片, 1984)と比較したのが表8(女性)と表9(男性)である。1号(女性)では徳之島より前頭骨が平坦で、頬骨の弯曲度も弱い、鼻根部は徳之島と同様に広くて扁平である。2号(男性)では前頭骨はより平坦で、頬骨の弯曲度は徳之島より強い。また鼻根部は徳之島より広くて扁平である。

南西諸島現代人の身長に関する資料は、古くから生体計測調査により数多く得られている(金関他, 1957, 1958; 岩井, 1959; 豊島, 1959; 富沢, 1969; 内藤, 1973など)。そのうち奄美大島現代人では男性で 158~161cm, 女性で 147~152cmといわれている(片平他, 1959; 欠田・小浜, 1967; 欠田他, 1973)。従って今回出土の現代人骨の右大腿骨最大長から算出した推定身長(1号 154.0cm, 2号 157.1cm)から, 1号は当地の女性としてはかなりの高身長であり, 2号は男性としてやや低身長であったと推定される。

以上のことから今回出土の現代人骨2体の形質は当時の南西諸島人に大略類似するといえる。しかし資料数が2体と少ないので, 今後当地域での人骨資料が増加した段階でより詳細な検討を加えたい。

表4 南西諸島人骨頭蓋計測値比較(女性)

Martin's No.	計測項目	現代1号	喜界島	与路島	徳之島	与論島	宮古島
		(n)	mean (n)	mean (n)	mean (n)	mean (n)	mean (n)
1	頭蓋最大長	178 (9)	179.1 (18)	173.7 (34)	177.2 (42)	177.9 (38)	173.9
8	頭蓋最大幅	138.5 (9)	136.4 (19)	135.5 (34)	135.6 (42)	138.7 (40)	138.2
17	Ba-Br 高	134 (9)	133.2 (9)	132.0 (33)	133.5 (38)	132.1 (21)	133.4
51	眼窩幅 I	42.5 (8)	41.9 (17)	39.7 (34)	42.5 (42)	41.1 (37)	40.7
52	眼窩高	34 (8)	33.2 (17)	32.4 (34)	33.0 (42)	32.9 (37)	32.8
54	鼻 幅	28 (8)	26.5 (17)	26.0 (33)	25.3 (42)	25.7 (33)	26.2
55	鼻 高	47 (9)	48.3 (16)	47.9 (34)	46.0 (42)	47.9 (34)	48.8
8/1	長幅示数	77.8 (8)	76.8 (17)	78.2 (34)	76.5 (42)	78.0 (36)	79.2
17/1	長高示数	75.3 (8)	74.4 (9)	73.4 (33)	75.4 (38)	74.4 (21)	76.6
17/8	幅高示数	96.8 (8)	97.3 (10)	95.6 (33)	98.7 (38)	95.2 (20)	96.8
52/51	眼窩示数	80.0 (8)	79.2 (17)	81.8 (34)	77.6 (42)	80.4 (37)	80.6
54/55	鼻示数	59.6 (8)	54.8 (16)	54.5 (33)	55.2 (42)	53.7 (33)	53.5

表5 南西諸島人骨頭蓋計測値比較(男性)

Martin's No.	計測項目	現代2号	喜界島	与路島	徳之島	与論島	宮古島
		(n)	mean (n)	mean (n)	mean (n)	mean (n)	mean (n)
1	頭蓋最大長	183 (17)	184.0 (24)	180.5 (57)	182.4 (37)	185.3 (70)	182.4
8	頭蓋最大幅	138 (16)	138.0 (24)	141.5 (57)	139.1 (38)	142.8 (68)	141.1
17	Ba-Br 高	141 (13)	139.9 (17)	137.7 (53)	139.9 (33)	136.5 (34)	136.8
51	眼窩幅 I	42 (16)	42.5 (23)	40.7 (57)	44.5 (37)	42.6 (69)	43.2
52	眼窩高	31 (16)	33.8 (23)	33.6 (57)	34.2 (37)	34.0 (69)	34.0
54	鼻 幅	(25) (16)	26.9 (22)	27.2 (57)	25.5 (37)	27.3 (70)	26.9
55	鼻 高	51 (16)	50.5 (22)	51.3 (57)	49.7 (37)	51.4 (69)	52.1
8/1	長幅示数	75.4 (16)	74.8 (23)	78.7 (57)	76.3 (37)	77.3 (65)	77.4
17/1	長高示数	77.1 (13)	75.1 (15)	76.8 (53)	76.7 (33)	73.8 (35)	74.8
17/8	幅高示数	102.2 (13)	101.7 (15)	96.0 (53)	100.7 (33)	96.0 (33)	97.0
52/51	眼窩示数	73.8 (16)	79.6 (22)	82.5 (57)	76.9 (37)	79.8 (68)	78.7
54/55	鼻示数	49.0 (16)	53.6 (21)	53.2 (52)	51.4 (37)	53.2 (66)	51.3

表6 南西諸島人骨間形態距離(女性、18項目)

	喜界島	与路島	徳之島	与論島	宮古島	鹿児島
長浜金久現代1号	0.846	1.318	0.782	0.825	1.009	1.317

表7 南西諸島人骨間形態距離(男性、17項目)

	喜界島	与路島	徳之島	与論島	宮古島	鹿児島
長浜金久現代2号	0.612	0.882	0.701	0.800	0.688	1.248

表8 鼻根部および顔面平坦度計測値比較(女性)

計測項目	現代1号 徳之島	
	(n)	mean
a 前頭骨弦	94	(28) 93.2
b 垂線高	14	(28) 15.9
c 頬骨水平弧	60	(22) 57.1
d 頬骨水平弦	54	(22) 50.3
e 水平弧高	11	(22) 10.8
f 頬骨垂直弧	48	(27) 46.6
g 頬骨垂直弦	47	(27) 44.6
h 前眼窩間幅	17	(29) 17.4
i 鼻根横弧長	19	(29) 19.5
j 鼻骨最小幅	8	(29) 8.8
k 前頭突起水平傾斜角	97°	(29) 86.8°
l 前頭突起上幅(左)	8	(29) 9.1
b/a 前頭骨平坦示数	14.9	(28) 17.1
e/d 水平弯曲示数	20.4	(22) 21.3
h/i 鼻根弯曲示数	89.5	(29) 89.2

表9 鼻根部および顔面平坦度計測値比較(男性)

計測項目	現代2号 徳之島	
	(n)	mean
a 前頭骨弦	95	(51) 97.5
b 垂線高	15	(51) 16.8
c 頬骨水平弧	68	(44) 62.3
d 頬骨水平弦	60	(44) 54.3
e 水平弧高	14	(44) 11.4
f 頬骨垂直弧	51	(49) 49.7
g 頬骨垂直弦	48	(49) 47.9
h 前眼窩間幅	20	(43) 17.4
i 鼻根横弧長	22	(43) 20.2
j 鼻骨最小幅	8	(43) 8.9
k 前頭突起水平傾斜角	94.5°	(43) 79.3°
l 前頭突起上幅(左)	9	(43) 9.2
b/a 前頭骨平坦示数	15.8	(51) 17.0
e/d 水平弯曲示数	23.3	(44) 21.0
h/i 鼻根弯曲示数	90.9	(43) 86.1

## 総括

1. 鹿児島県大島郡笠利町長浜金久遺跡から、古代人骨1体、現代人骨2体、計3体の人骨が出土した。古代人骨は成人女性のものと思われる左上腕骨骨体部のみであり、短く細いが、筋付着部が著しく発達し、恐らく上腕をかなり使用する生活を営んでいたと考えられる。現代人骨のうち1体(現代人骨1号)は熟年期の女性で、もう1体(同2号)は壮年期の男性である。

2. 現代人骨1号の脳頭蓋は中頭・高頭・中頭型を示し、顔面頭蓋は上顎骨齒槽突起の著しい萎縮のため形態を示数で表すことが不能である。眼窩示数は中眼窩型で、鼻示数は過広鼻型を示す。2号の脳頭蓋は中頭・高頭・尖頭型で、顔面頭蓋は1号と同様に一部の計測が不能である。眼窩示数は低眼窩型、鼻示数は中鼻型を示す。前頭骨は1・2号とも平坦で、鼻根部は

広くて扁平である。両者とも歯周疾患が顕著に見られるほか、残存するほとんどの歯に齲蝕が認められる。2号には床状突起間骨橋がある。

3. 体肢骨は1号では全体に細く長い。大腿骨骨体上部は扁平で、骨体にわずかに柱状形成が見られる。2号の体肢骨は全般に太く短い。大腿骨骨体上部はわずかに扁平で、骨体に柱状形成は認められない。脛骨は軽度の扁平性を示す。右大腿骨最大長から算出した推定身長(Pearson)は1号で154.0cm, 2号で157.1cmであり、前者は当地の女性としてはかなりの高身長であったと推定される。

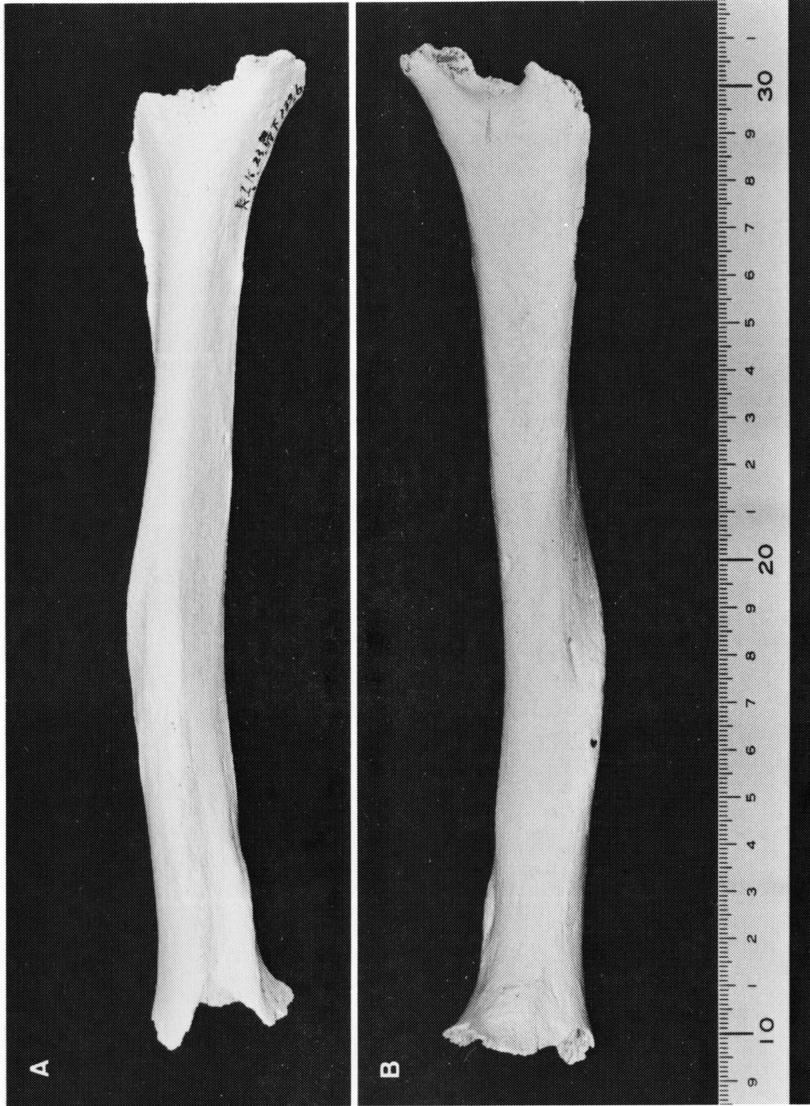
4. 病的所見としては1号の左右脛・腓骨に対称的な骨増殖と中足骨の萎縮が見られるほか、2号には頭蓋梨状口縁の鈍化と左右尺骨に病変が認められる。これらは全身的な慢性炎症に起因するものと思われる。そのほか2号には第3・第4腰椎の脊椎分離症と仙骨披裂があり、まだ1・2号とも下位腰椎椎体縁に骨棘が存在する。

5. 頭蓋計測値を南西諸島の風葬人骨資料と比較すると、大略それらと類似している。

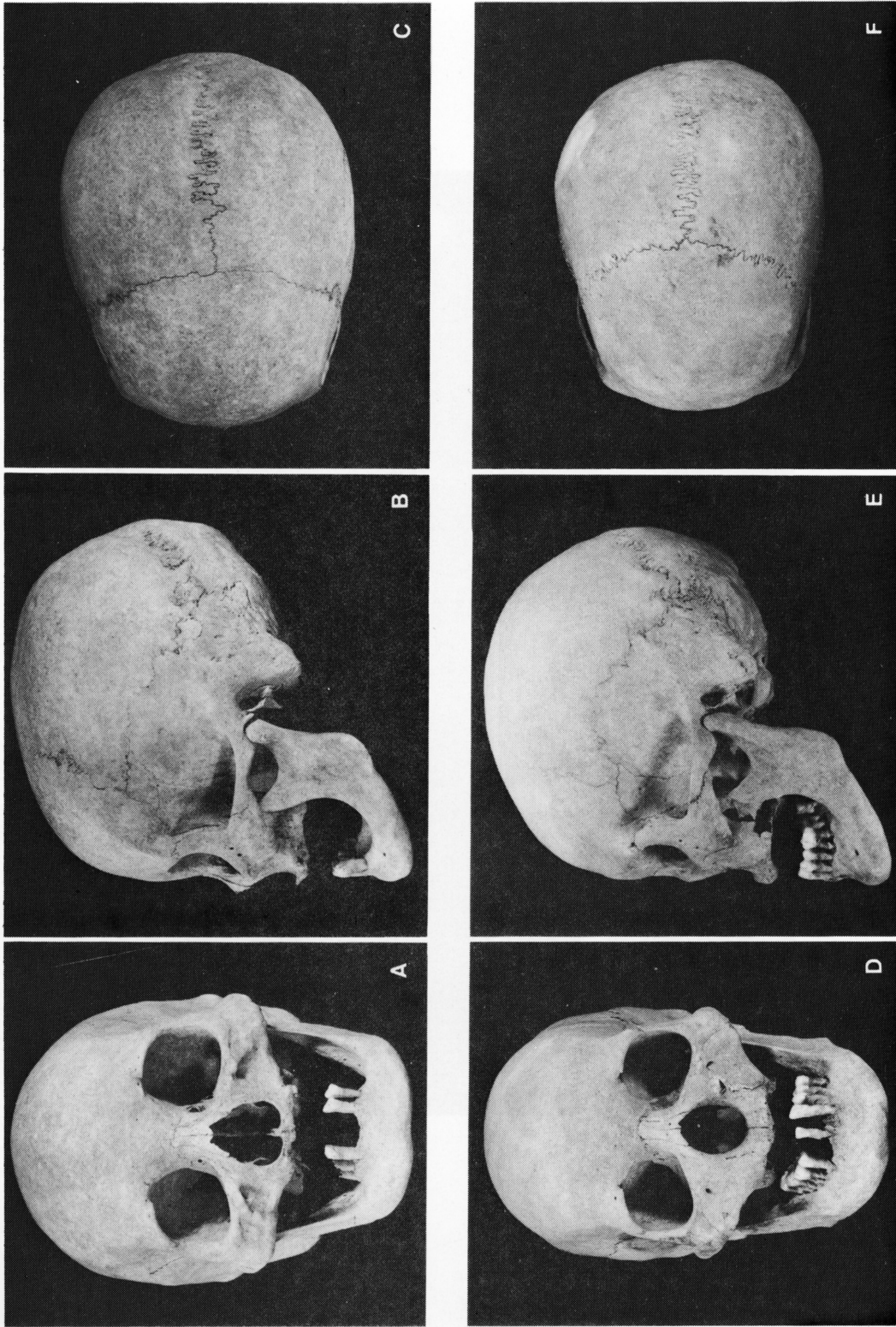
## 参 考 文 献

- Constandse-Westermann, T.S., 1972: Coefficients of biological distance. *Anthrop. Publications*, Oosterhout, the Netherlands.
- Howells, W.W., 1973: Cranial variation in man. *Pap. of Peabody Mus. Archeol. Ethnol.* Vol. 67, Harvard Univ.
- 池田次郎, 1974: 沖縄・宮古島現代人頭骨の計測. *人類誌* 82(2): 150-160.
- 岩井成功, 1959: 鹿児島県大島郡徳之島々民頭骨の研究. *鹿児島大学医学雑誌* 11(3): 1049-1089.
- 岩井勇作, 1959: 鹿児島県大島郡徳之島住民の形質人類学的研究. *鹿児島大学医学雑誌* 11(2): 379-391.
- 金関丈夫・永井昌文・牛島陽一, 1957: 奄美群島与論島住民の人類学的研究. *人類科学* 9: 98-106.
- 金関丈夫・永井昌文・大山秀高, 1958: 喜界島民の生体計測. *人類科学* 10: 115-121.
- 欠田早苗・小浜基次, 1967: 奄美群島の形質人類学的研究補遺. *人類学輯報* 36: 127-133.
- 欠田早苗・川上則子・佐藤律子, 1973: 奄美群島の形質人類学的研究. *人類誌* 81(3): 195-202.
- 片平可也・山田春雄・久木原忠満・堀之内正夫, 1959: 奄美大島住民の形質人類学的研究. *鹿児島医学会雑誌* 32: 80-88.
- 川路則友・小片丘彦, 1984: 徳之島風葬人骨の鼻根付近の形態について. *人類誌(会)* 92(2): 115.
- 菊池順正, 1959: 奄美大島与路島島民頭骨の人類学的研究. *人類学研究* 6(2): 366-398.
- Martin, R. & K. Saller, 1957: *Lehrbuch der Anthropologie*. Bd.1. Gustav Fischer, Stuttgart.

- 内藤芳篤, 1973: 南西諸島住民の人類学的研究. 人類科学 25: 163 - 194.
- 中野哲太郎, 1958: 鹿児島県大島郡喜界島島民頭骨の研究. 人類学研究 5(1-4): 188 - 219.
- 大山秀高, 1956: 鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究. 人類学研究 3(3-4): 396 - 434.
- 鈴木 尚, 1963: 日本人の骨. 岩波書店.
- 富沢忠彦, 1969: 奄美群島徳之島住民の形質人類学的研究. 長崎医学会雑誌 44(1-2): 45 - 69.
- 豊島正治, 1959: 奄美群島沖永良部島々民の形質人類学的研究 第1編 生体計測について. 長崎医学会雑誌 34(8): 981 - 992.
- Woo, T.L., 1937: A biometric study of the human malar bone. *Biometrika* 29: 113 - 123.
- Woo, T.L. & G.M. Morant, 1934: A biometric study of the flatness of the facial skeleton in man. *Biometrika* 26: 196 - 250.

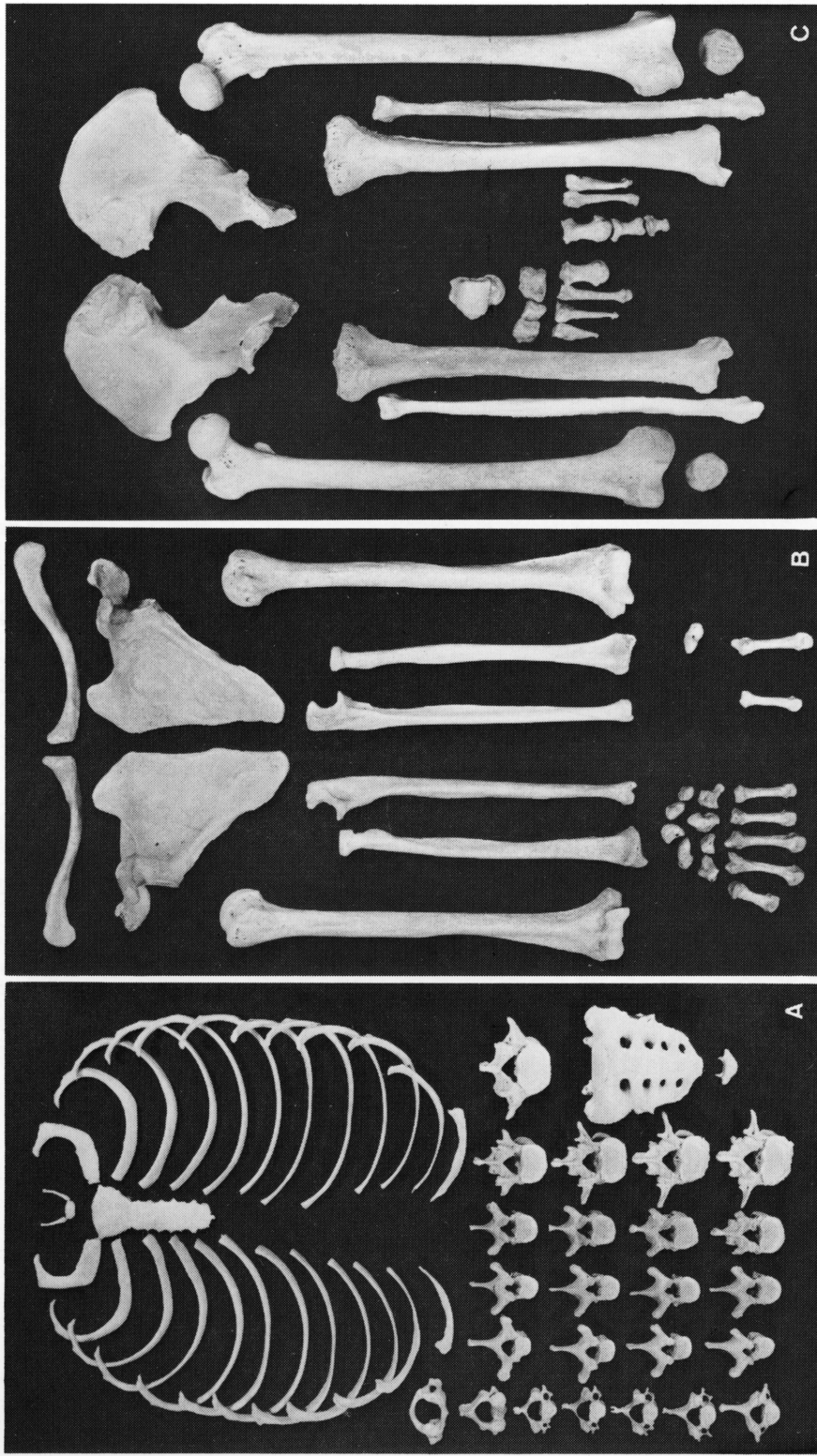


古代人骨(女性·成人) A. 左上腕骨前面 B. 同後面

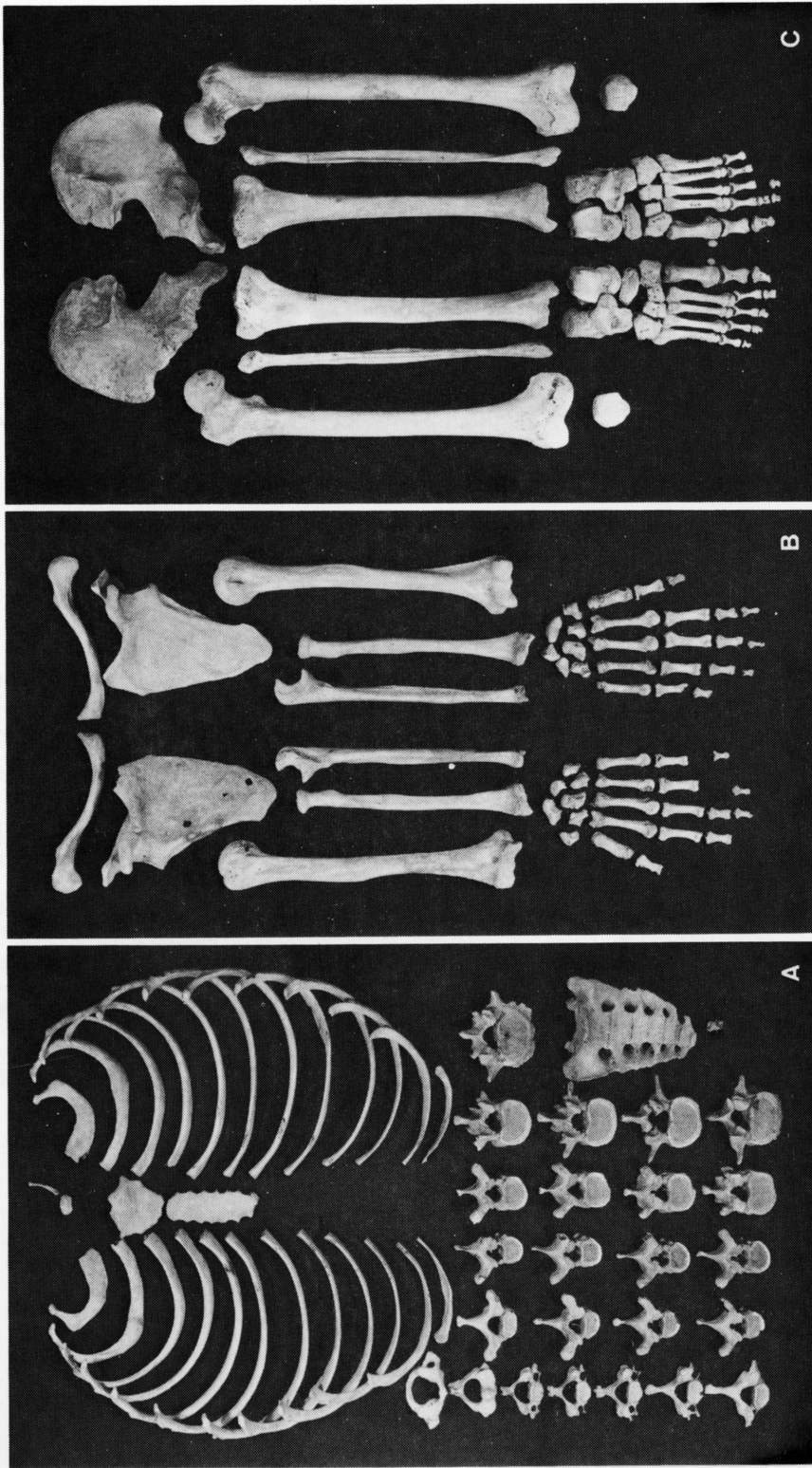


上：現代人骨1号(女性・熟年) A: 頭蓋前面 B: 同左側面 C: 同上面  
下：現代人骨2号(男性・壮年) D: 頭蓋前面 E: 同左側面 F: 同上面





现代人骨1号(女性·熟年) A. 体幹骨 B. 上肢骨 C. 下肢骨



現代人骨2号(男性・壮年) A. 体幹骨 B. 上肢骨 C. 下肢骨

### 3. 鹿児島県笠利町長浜金久第Ⅱ遺跡出土の弥生時代小児骨

分 部 哲 秋\*

#### は じ め に

鹿児島県大島郡笠利町(奄美大島)大字和野字長浜金久にある長浜金久遺跡から、1983年(昭和58年)の発掘調査によって、埋葬人骨1体(1号人骨)が出土した。この埋葬人骨は別稿で述べられているように、弥生時代前期に属する人骨である。

今回出土した小児骨は、保存状態が比較的良好なもので、この地域における弥生時代幼小児骨の形質を考察する上で貴重な資料と考えられるので、詳細な観察および計測を行った。その結果について報告したい。

#### 資 料・方 法

この人骨の年齢および年齢区分は、所見で述べているように、約15才で、小児(Ⅱ)期と推定される。ただし、年齢については藤田(1965)による現代人の歯の萌出時期と金田(1957)による現代人の歯根形成時期を用いて、現代と弥生時代におけるそれらが大差ないと仮定したうえで推定したものである。また、幼小児骨の性差に関しては、種々の研究がなされているが、現状では性別を同定することがむずかしく、本例についても不明である。

計測は Martin-Saller(1957)の方法で行ったが、脛骨の横径については森本(1971)にならい、オリビエの方法に従った。ただし、幼小児骨の四肢骨は骨端軟骨部で分離し、欠如する例が多いため、両骨端を除いた骨体での計測も行い、表名を骨体計測値とした。

比較資料としては、同年令の例として大友弥生小児骨(分部, 1981)を用いた。また、成人骨の資料としては、大友弥生人(松下, 1981)、奄美大島出土の宇宿弥生人(松下, 1979)および徳之島出土の面縄弥生人(松下, 1983)を用いた。

#### 所 見

各骨の計測値は表6~13に示すとおりである。

##### (1) 頭 蓋

###### 1. 脳頭蓋

脳頭蓋は、前頭骨の右眼窩上縁の一部および頭頂縁の一部を欠くほかはほぼ完全である。前頭結節は良く膨隆しているが、外後頭隆起の発達は悪く、乳様突起も小さい。

脳頭蓋の主要計測値は、頭蓋最大長が172mm、頭蓋最大幅が145mm、バジオン・プレグマ高は129mmである。頭蓋長幅示数は84.30、頭蓋長高示数は75.00、頭蓋幅高示数は88.97となり、頭

\*Tetsuaki Wakebe, Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University

(長崎大学医学部解剖学第二教室)

型はそれぞれ、brachy-,hypsi-,tapeinokran(短・高・低頭)に属している。また頭蓋水平周は、505mm、横弧長は317mm、正中矢状弧長は370mmである。

次いで、脳頭蓋の主要計測値について、同年令の大友Yd-22号と比較してみた(表1)。頭蓋最大長は大友Yd-22号よりも小さく、頭蓋最大幅は大きい。従って、頭蓋長幅示数はかなり大きく、大友Yd-22号の頭型が中頭型に属しているのに対して、長浜金久のそれは短頭型の上限に位置している。成人女性骨においても、近隣地域から出土した宇宿・面縄両弥生人は大友弥生人よりも短頭性が強く、小児骨にみられる傾向と一致している。また、周径については、頭蓋水平周は大友Yd-22号よりやや大きく、横弧長および正中矢状弧長はかなり大きい。

表1 脳頭蓋計測値

(mm)

	小児骨 (15才)		成人骨 (女性)					
	長浜金久1号	大友Yd-22号 (分部)	宇宿弥生人 (松下)		面縄弥生人 (松下)		大友弥生人 (松下)	
			n	M	n	M	n	M
1. 頭蓋最大長	172	177	1	170	1	165	18	178.11
8. 頭蓋最大幅	145	137	1	149	1	136	17	141.18
17. バジオン・プレグマ高	129	—	1	130	1	130	13	128.31
8/1 頭蓋長幅示数	84.30	77.40	1	87.65	1	82.42	13	80.30
17/1 頭蓋長高示数	75.00	—	1	76.47	1	78.79	13	72.92
17/8 頭蓋幅高示数	88.97	—	1	87.25	1	95.59	13	91.39
23. 頭蓋水平周	505	498	1	506	1	486	18	515.44
24. 横弧長	317	281	1	317	1	304	18	306.00
25. 正中矢状弧長	370	351	1	368	1	352	10	362.90

## 2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は鼻骨と上顎骨の左側前頭突起を欠く他は、ほぼ完全である。眉間はやや隆起しているものの、眉上弓の隆起は全く認められない。

主要計測値は、頬骨弓幅が121mm、中顔幅は93mm、顔高は93mm、上顔高は54mmで、したがって、顔示数は76.86(K)、100.00(V)、上顔示数は44.63(K)、58.06(V)となり、低顔の傾向が強い。

眼窩は欠損のため、一部のみが計測可能で、眼窩幅は39mm(左)、眼窩高は31mm(右)である。眼窩示数は算出できないが、観察によれば顔面が低い割には、眼窩の形態は低眼窩ではないと推測される。鼻幅は計測できないが、鼻高は42mmで低い。測

下顎骨は、左側下顎頭の外側部を欠く他は完全である。諸径は小さく、特に高径が低く、筋附着部の発達も悪い。また、下顎枝角は小さく、後方への傾きは弱い。

次に、脳頭蓋と同様に、大友Yd-22号の成績と比較してみると(表2)、幅径である上顔幅および中顔幅はほぼ同じ値を示しているが、顔高および上顔高は大友Yd-22号よりも小さい。したがって、ウイルヒョウの顔示数、上顔示数も小さく、大友Yd-22号も低顔を特徴とする小児骨

であるが、本例はこれよりも一層低顔の傾向を強くそなえている。成人女性骨においても、宇宿弥生人ウイルヒョウの顔示数(V)を除けば、宇宿・面縄両弥生人の顔示数および上顔示数は大友弥生人よりも小さく、より低・広顔の傾向が強く認められる。

表2 顔面頭蓋計測値

(mm)

	小児骨 (15才)		成人骨 (女性)					
	長浜金久1号	大友Yd-22号 (分部)	宇宿弥生人 (松下)		面縄弥生人 (松下)		大友弥生人 (松下)	
			n	M	n	M	n	M
43. 上 顔 幅	99	98	—	1	101	13	102.62	
45. 頬 骨 弓 幅	121	—	1	135	—	1	125	
46. 中 顔 幅	93	92	1	99	1	98	10	94.90
47. 顔 高	93	101	1	112	1	96	5	110.60
48. 上 顔 高	54	59	1	63	1	61	6	62.17
47/45 顔 示 数(K)	76.86	—	1	82.96	—	—	—	
48/45 上 顔 示 数(K)	44.63	—	1	46.67	—	—	—	
47/46 顔 示 数(V)	100.00	109.78	1	113.13	1	97.96	4	111.82
48/46 上 顔 示 数(V)	58.06	64.13	1	63.64	1	62.24	5	64.88

### 3. 歯

歯は、上下両顎ともに、すべての歯が釘植しており、風習的抜歯は認められない。残存した歯を歯式で示すとおりである。

M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>
(M <sub>3</sub> ) M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>

[( ) : 歯槽内埋伏]

歯の萌出状態は上下両顎とも、M<sub>2</sub>まで萌出している。咬耗はすべての歯に認められ、その程度はBrocaの1~2度である。歯根は上下両顎のM<sub>2</sub>以外はすべて完成している。M<sub>2</sub>についても先端部のみが未形成である。

#### (2) 四肢骨

##### 1) 上肢骨

##### 1. 上腕骨

右側は骨体が残存しているが、破損がひどく、計測は不可能である。左側は骨頭の外側部を欠如しているが、その他は完全である。骨体は長さの割に細く、三角筋粗面の発達も悪い。

計測値は、上腕骨最大長が239mm(左)、骨体最小周は44.0mm(左) 中央周は48.0mm(左)で、長厚示数は18.41(左)となる。中央最大径は16.7mm(左)、中央最小径は11.5mm(左)で、骨体断面示数は68.86(左)となり、骨体は扁平である。

次に、大友Yd-22号と比較してみると(表3)、上腕骨最大長は大友Yd-22号より小さく、また、最小周も小さいが、長厚示数はほぼ同じ値である。中央最大径はやや大きく、中央最小径

はやや小さいため、骨体断面示数は小さく、大友 Yd-22号に比べると骨体はかなり扁平である。成人女性骨との比較では、短くて細い点では宇宿弥生人により近いが、骨体に扁平性が認められる点ではやや異なっている。

表3 上腕骨(右)

(mm)

	小児骨(15才)		成人骨(女性)							
	大友 Yd-22号 (分部)		宇宿弥生人 (松下)		面縄弥生人 (松下)		大友弥生人 (松下)			
	長浜金久1号		n	M	n	M	n	M		
1. 上腕骨最大長	239	(1)	250	(1)	1	263	1	271	5	270.20
2. 上腕骨全長	237	(1)	246	(1)	1	259	1	266	5	265.40
5. 中央最大径	16.7	(1)	15.8	(1)	1	18	1	21	25	21.68
6. 中央最小径	11.5	(1)	13.3	(1)	1	15	1	16	25	15.48
7. 骨体最小周	44.0	(1)	46.0	(1)	1	50	1	57	20	57.65
7(a). 中央周	48.0	(1)	47.5	(1)	1	54	1	63	23	61.96
6 / 5 骨体断面示数	68.86	(1)	84.18	(1)	1	83.33	1	76.19	25	71.53
7 / 1 長厚示数	18.41	(1)	18.40	(1)	1	19.01	1	21.03	5	21.18

2. 橈骨

左右ともに骨体が残存しているが、両端を欠損している。長さは短く骨体は細い。

3. 尺骨

左右ともに両端を欠く骨体が残存している。橈骨と同様に長さは短く、骨体は細い。また、骨間縁の発達も悪い。

2) 下肢骨

1. 大腿骨

右側は骨体の遠位端を欠き、左側は骨頭、内側顆および外側顆の一部を欠損している。長径は短くて、骨体は細い。粗線はこの年齢にしては外側唇がやや発達しているが、骨体の断面形は円に近い。

計測値は、最大長は354mm(左)、自然位全長は351mm(左)、骨体中央周は58.0mm(右)、57.0mm(左)で、長厚示数は16.24(左)となり、示数値は小さく、骨体はきゃしゃである。骨体中央矢状径は19.3mm(右)、18.6mm(左)、骨体中央横径は18.2mm(右)、18.1mm(左)で、骨体中央断面示数は106.04(右)、102.76(左)である。また上骨体断面示数は80.63(右)、77.88(左)となり、骨体上部には弱い扁平性が認められる。

次いで、大友 Yd-22号と比較してみると(表4)、骨体中央周は大友 Yd-22号よりもかなり小さく、大友小児骨の骨体も細いものであるが、それ以上に、本例の骨体は細い。骨体中央矢状径は大友 Yd-22号より小さく、骨体中央横径はほぼ同じであるため、骨体中央断面示数は小さい値を示している。上骨体断面示数は大友 Yd-22号よりもかなり小さい。以上のように、大友 Yd-22号と対比した場合の本例の特徴は、成人女性骨における宇宿および面縄両弥生人の傾向

と良く一致している。

表4 大腿骨計測値(右)

(mm)

	小児骨(15才)		成人骨(女性)						
	長浜金久1号	大友Yd-22号 (分部)	宇宿弥生人 (松下)		面縄弥生人 (松下)		大友弥生人 (松下)		
			n	M	n	M	n	M	
1. 最大長	354	(1)	—	1	370	1	372	5	386.80(1)
2. 自然位全長	351	(1)	—	1	368	1	370	4	378.25(1)
6. 骨体中央矢状径	19.3		21.4	1	22	1	23	30	26.00
7. 骨体中央横径	18.2		18.0	1	24	1	23	30	25.03
8. 骨体中央周	58.0		63.0	1	71	1	73	28	80.32
8./2 長厚示数	16.24	(1)	—	1	19.29	1	19.73	4	20.30(1)
6/7 骨体中央断面示数	106.04		118.89	1	91.67	1	100.00	30	104.05
10/9 上骨体断面示数	80.63		96.41	1	75.00	1	71.43	32	78.42

2. 脛骨

右側は骨体の両端を欠損しているが、左側は近位端の一部を欠くのみで、ほぼ完全である。骨体は細く、ヒラメ筋線の発達が悪い。

計測値は、脛骨全長が276mm(左)、脛骨最大長は283mm(左)、骨体周は56.0mm(右、左)、最小周は53.0mm(右、左)で、長厚示数は19.20(左)となり、示数値は小さく、骨体は細くきゃしゃである。中央最大径は20.2mm(右、左)、中央横径は15.4mm(右)、15.3mm(左)で、中央断面示数は76.24(右)、75.74(左)となり、扁平性は認められない。

次いで、大友Yd-22号と比較してみると(表5)、骨体周および最小周は大友Yd-22号よりもかなり小さく、骨体は細い。中央最大径および中央横径も小さく、中央断面示数は大きい。すなわち、脛骨の骨体は細く、扁平性が認められず、この特徴は大腿骨と同様に、宇宿および面縄両弥生人の傾向に似ている。

表5 脛骨計測値(右)

(mm)

	小児骨(15才)		成人骨(女性)						
	長浜金久1号	大友Yd-22号 (分部)	宇宿弥生人 (松下)		面縄弥生人 (松下)		大友弥生人 (松下)		
			n	M	n	M	n	M	
1. 脛骨全長	276	(1)	—	1	309	1	312	2	311.50
1a. 脛骨最大長	283	(1)	—	1	316	1	319	3	323.00
8. 中央最大径	20.2		22.4	1	23	1	24	27	27.00
9. 中央横径	15.4		16.3	1	18	1	19	29	19.48
10. 骨体周	56.0		61.5	1	65	1	68	27	74.74
10b. 最小周	53.0		58.0	1	61	1	65	23	68.17
9/8 中央断面示数	76.24		72.77	1	78.26	1	79.17	27	71.79
10b/1 長厚示数	19.20(1)		—	1	19.74	1	20.83	2	21.86

### 3. 腓骨

左右ともに腓骨頭を欠いているが、その他はほぼ完全である。骨体は細く、稜の発達も悪い。

### (3) 化骨

化骨の進行状態については、橈骨および尺骨の遠近両端が欠損しているために観察不能であったが、その他の部位は観察することができた。

頭蓋では、前および後後頭骨内軟骨結合はすでに化骨しているが、蝶後頭軟骨結合は未癒合である。四肢骨では上腕骨の滑車および小頭はすでに骨癒合を完了しているが、それ以外はすべて未癒合である。

### (4) 年齢

歯の萌出状態は上下両顎ともに、 $M_2$ まで萌出し、咬耗も認められる。藤田(1965)によれば、現代人の上顎 $M_2$ は男性平均11才11ヶ月、女性平均12才で萌出する。したがって、萌出状態からは、年齢は少なくとも12才以上と推定される。歯根は上下両顎ともに、 $M_2$ が未完成である。金田(1957)の現代人の歯根形成時期によれば、歯根が完成している歯の中では、上顎 $P_2$ 最も遅く、14才で完成する。また、未完成の $M_2$ 歯根形成程度は、金田の現代人15才に相当するものである。従って、現代人と弥生時代における歯の萌出時期、歯根形成時期が大差ないと仮定すれば、本人骨の年齢はほぼ15才と推定される。

## 総 括

鹿児島県大島郡笠利町(奄美大島)にある長浜金久遺跡から、弥生時代に属する小児骨1体が出土した。保存状態は比較的良好で、幼小児骨の人類学的研究を進めるうえで、貴重な資料となるものと考えられるので、詳細な観察および計測を行った。その結果を要約すると次のとおりである。

1. 年齢は、歯の萌出状態および歯根の形成程度から約15才と推定される。
2. 頭蓋最大長は172mm、頭蓋最大幅は145mm、バジオン・プレグマ高は129mmで、頭蓋長幅示数は84.30、頭蓋長高示数は75.00、頭蓋幅高示数は88.97となり、頭型はそれぞれ、brachy-, hypsi-, tapeinokran(短・高・低頭)に属している。
3. 頬骨弓幅は121mm、中顔幅は93mm、顔高は93mm、上顔高は54mmで、顔示数は76.86(K)、100.00(V)、上顔示数は44.63(K)、58.06(V)となり、顔面頭蓋には強い低顔の傾向が認められる。
4. 風習的抜歯は認められない。
5. 上腕骨、大腿骨および脛骨はみじかくて骨体も細く、きゃしゃである。また、筋付着部の発達も悪いが、上腕骨の骨体および大腿骨の骨体上部には弱い扁平性が認められる。
6. 以上のように、本例の頭蓋は短頭で、低顔の傾向が強く、四肢骨は短くて、細くきゃしゃなものであった。このような特徴は、同一地域から出土した宇宿弥生人(1979)、および面縄弥生人の傾向に近いことから、すでに小児期から成人にみられる特徴が表れているものと推



測される。しかしながら、小児骨の例数はわずかに1例であり、また、この地域から出土した成人骨の資料も少なく、形質については、必ずしも明らかにはされていないので、この点に関しては、今後さらにこの地域での古人骨の収集に努め、研究を進めていきたい。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた、笠利町教育委員会、鹿児島県教育庁文化課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

表6 脳頭蓋計測値 (mm)

1.	頭蓋最大長	172
8.	頭蓋最大幅	145
17.	バジオン・プレグマ高	129
8/1.	頭蓋長幅示数	84.30
17/1.	頭蓋長高示数	75.00
17/8.	頭蓋幅高示数	88.97
9.	最小前頭幅	95
10.	最大前頭幅	120
5.	頭蓋底長	94
11.	両耳幅	121
12.	最大後頭幅	109
13.	乳突幅	97
7.	大後頭孔長	28
16.	大後頭孔幅	28
16/7.	大後頭孔示数	100.00
23.	頭蓋水平周	505
24.	横弧長	317
25.	正中矢状弧長	370

表7 顔面頭蓋計測値 (mm)

40.	顔長	84
41.	側顔長	64
42.	下顔長	90
43.	上顔幅	99
45.	頬骨弓幅	121
46.	中顔幅	93
47.	顔高	93
48.	上顔高	54
47/45.	顔示数(K)	76.86
48/45.	上顔示数(K)	44.63
47/46.	顔示数(K)	100.00
48/46.	上顔示数(K)	58.06
44.	両眼窩幅	91
51.	眼窩幅(右)	39
52.	眼窩高(左)	31
55.	鼻高	42

表8 上腕骨計測値

		左
1.	上腕骨最大長	239 (226)
2.	上腕骨全長	237
4.	下端幅	— (46)
5.	中央最大径	16.7 (16.3)
6.	中央最小径	11.5 (11.5)
7.	骨体最小周	44.0
7(a)	中央周	48.0 (47.5)
6/5	骨体断面示数	68.86(70.55)
7/1	長厚示数	18.41(19.47)

表9 橈骨骨体計測値 (mm)

		右	左
3.	最小周	32.0	31.0
4.	骨体横径	12.5	12.0
4 a.	骨体中央横径	12.5	11.8
5.	骨体矢状径	8.4	8.2
5 a.	骨体中央矢状径	8.4	8.3
5(5).	骨体中央周	33.0	32.5
5/4	骨体体面示数	67.20	68.33
5 a/4 a	中央断面示数	67.20	70.34

( ) は、骨体計測値

表10 尺骨骨体計測値 (mm)

	右	左
3. 最小周	27.0	27.0
11. 尺骨矢状径	9.8	10.2
12. 尺骨横径	10.5	11.0
S. 中央最小径	9.2	9.0
L. 中央最大径	10.2	11.0
C. 中央周	32.0	33.0
11/12 骨体断面示数	93.33	92.73
S/L 中央断面示数	90.20	81.82

表11 大腿骨計測値 (mm)

	右	左
1. 最大長	—	354 318
2. 自然位全長	—	351 —
6. 骨体中央矢状径	19.3 (19.4)	18.6 (18.7)
7. 骨体中央横径	18.2 (18.2)	18.1 (18.1)
8. 骨体中央周	58.0 (58.0)	57.0 (57.0)
9. 骨体上横径	22.2	22.6
10. 骨体上矢状径	17.9	17.6
8/2 長厚示数	—	16.24 —
6/7 骨体中央断面示数	106.04(106.59)	102.76(103.31)
10/9 上骨体断面示数	80.63	77.88

表12 脛骨計測値

	右	左
1. 脛骨全長	—	276
1 a. 脛骨最大長	—	283 (256)
2. 顆距長	—	263
8. 中央最大径	20.2 (20.1)	20.2 (20.2)
8 a. 栄養孔位最大径	22.5	22.4
9. 中央横径	15.4 (15.4)	15.3 (15.3)
9 a. 栄養孔位横径	16.0	16.8
10. 骨体周	56.0 (56.0)	56.0 (56.0)
10 a. 栄養孔位周	61.0	61.0
10 b. 最小周	53.0	53.0
9/8 中央断面示数	76.24(76.62)	75.74 (75.74)
9 a/8 a 栄養孔位断面示数	71.11	75.00
10 b/1 長厚示数	—	19.20

( ) は、骨体計測値

表13 腓骨骨体計測値 (mm)

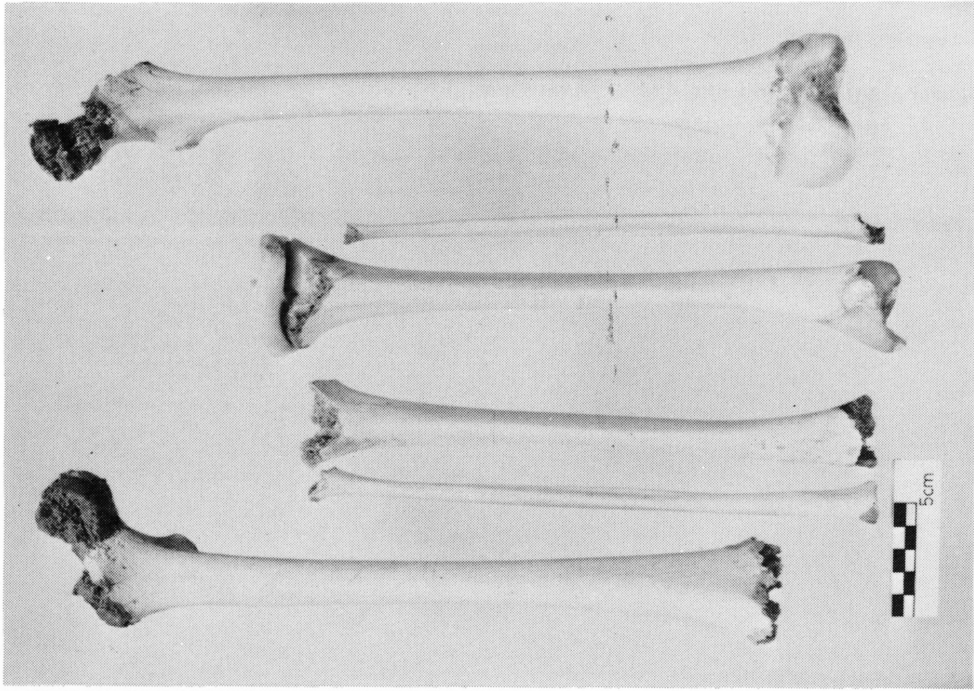
	右	左
1. 最大長	251	—
2. 中央最大径	10.4	9.7
3. 中央最小径	8.7	8.1
4. 中央周	31.0	29.0
4 a. 最小周	22.5	21.0
3/2 中央断面示数	83.65	83.51
4 a/1 長厚示数	8.96	—

### 参考文献

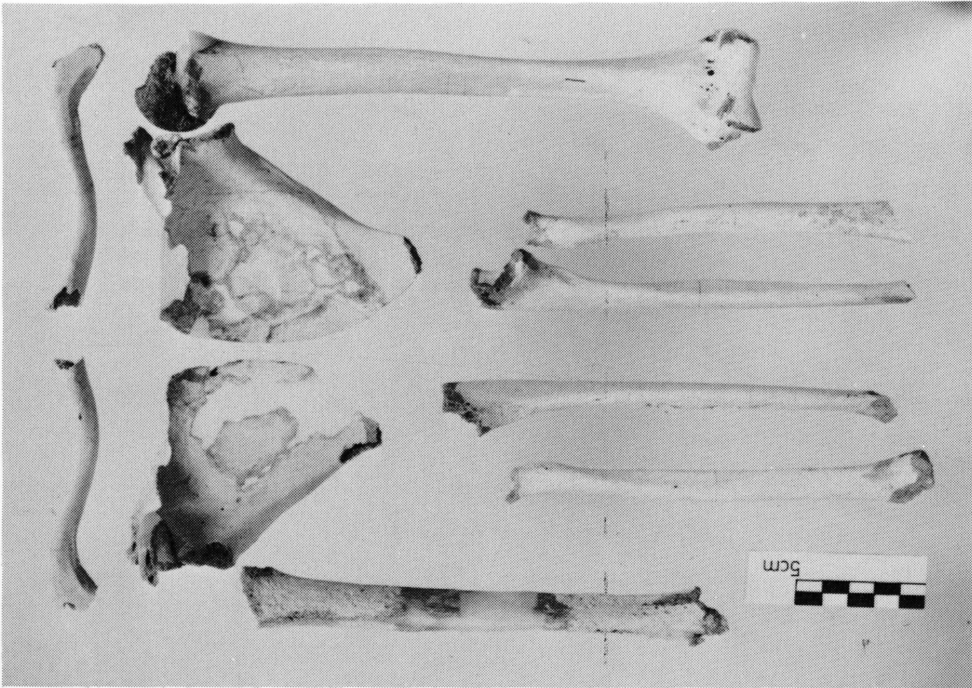
1. 藤田恒太郎, 1965: 歯の話. 岩波書店. 東京: 57—98.
2. 金田義夫, 1957: 日本人の永久歯における歯根完成時期の研究. 歯科月報, 30: 165—172.
3. 金関丈夫, 1955: 弥生人種の問題. 日本考古学講座, 4: 238—252.
4. 金関丈夫, 1959: 弥生時代の日本人. 日本の医学—第15回日本医学会総会学術集会記録—, 1: 167—174.
5. 金関丈夫, 1966: 弥生時代人. 日本の考古学, 3: 460—471.
6. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fisher Verlag. Stuttgart: 429—597.
7. 松下孝幸, 1979: 宇宿貝塚出土の人骨. 宇宿貝塚, 鹿児島考古, 13: 210—220.
8. 松下孝幸: 佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨. 大友遺跡 (佐賀県呼子町文化財調査報告書)

査報告書第1集) : 223—253.

9. 松下孝幸, 石田肇, 1983: 鹿児島県伊仙町面縄第1貝塚出土の弥生時代人骨. 面縄第1・第2貝塚(伊仙町埋蔵文化財調査報告書1) : 51—64.
10. 内藤芳篤, 1981: 弥生時代人骨. 人類学講座5(日本人1), 雄山閣, 東京: 57—99.
11. 内藤芳篤, 松下孝幸, 1981: 弥生時代人骨. 季刊人類学, 12(1): 27—37.
12. 鈴木重一, 1943: 四肢化骨核発育に関するレ線学的研究. 千葉医学会雑誌, 21: 349—417.
13. 分部哲秋, 1981: 佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨. 大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書1) : 254—264.
14. 分部哲秋, 1983: 長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代児骨. 長崎県埋蔵文化財調査集幼小報Ⅵ(長崎県文化財調査報告66) : 124—134.
15. 分部哲秋, 1984: 長崎県浜郷遺跡出土の弥生時代幼小児骨(会). 解剖学雑誌, 59: 410.



1号人骨(小児)下肢骨



1号人骨(小児)上肢骨

## 4. 鹿児島県笠利町長浜金久遺跡出土の人骨

松下孝幸\*

### はじめに

鹿児島県大島郡笠利町（奄美大島）大字和野字長浜金久に所在する長浜金久遺跡の発掘調査が1983年(昭和58年)に行なわれ、この調査で人骨が発掘、採集された。人骨は3体であったが、このうちの1体が埋葬人骨（1号人骨）で、あとの残りは散乱骨や表面採集した人骨である。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、日本人の成り立ちや日本人の形質変化を解明するために、西日本各地から出土する古人骨の蒐集とその形質人類学的研究を続けている。南西諸島群の古人骨に関しては、この地域の各時代ごとの特徴を明らかにするとともに、このような特徴が九州本土の形質の特徴とどのような関係にあるのかを解明するための研究を続けているが、資料数が少なすぎて、このような課題に明快な解答を出せるところまでは至っておらず、資料の蒐集に力を注ぎ、これらの人骨を報告記載し、資料化を続けているのが現状である。

本例は残存量は少ないが、上記のような我々の研究観点から人骨の特徴などを報告しておきたい。

### 資 料

今回の調査で発掘あるいは採集した人骨は3体分の人骨で、このうち1体（1号人骨）は埋葬された状態で出土し、所属時代も考古学的所見から弥生時代前期のものと推定されている。残りの2体のうち1体（2号人骨）は散乱状態で出土したもので、保存状態は良好であるが、残存量は著しく少ない。この人骨は、縄文時代に属すると推定されている。また、残りの1体（3号人骨）は表面採集したもので、所属時代を明確にすることはできなかったが、人骨の表面にげっし類の歯でできたものと考えられる傷が多数認められることから、この人骨は長く地表近くにあったものと考えられ、また、まわりに風葬（トフル墓）の跡があることから、この人骨はおそらく風葬骨の一部であろう。各人骨の性別・年令などは表1に示すとおりである。

表1 資料

人骨番号	性別	年令	時代
1号人骨	—	小児(15才)	弥生時代前期
2号人骨	不明	壮年	縄文時代、女性の可能性あり
3号人骨	男性	不明	不明

なお、小児骨（1号人骨）については、分部が別稿で詳述しているので本稿では成人骨についてのみ報告する。

人骨の計測方法は、Martin-Saller (1957)の方法で計測した。また、歯の計測は藤田(1949)の方法で行い。1/20mm副尺付のノギスで計測した。

\* 長崎大学医学部解剖学第二教室

## 所 見

### 2号人骨 (壮年)

残存していたのは図2に示しているとおり、頭蓋のごく一部と下顎骨の右側半分である。

#### (1) 頭蓋骨

右側頭頂骨の一部が残存していたにすぎない。その骨壁はあまり厚いものではない。

#### (2) 下顎骨

下顎骨もそれほど大きいものではなく、下顎切痕はやや深く、また角前切痕も認められるが、下顎角は強く外反している。下顎枝の後方への傾斜はやや大きい。下顎骨の計測値は表2に示すとおりである。

表2 下顎骨計測値 (右, mm)

69(1)	下顎体高	32
69(2)	下顎体高	27
70(1)	前枝高	63
70(2)	最小枝高	52
71.	枝幅	32
71 a.	最小枝幅	31

表4 歯の計測値 (右, m)

	頬(唇)舌径	近遠心径
下顎P <sub>2</sub>	8.80	7.10
下顎M <sub>1</sub>	10.90	12.00
下顎M <sub>2</sub>	11.00	11.90

次に、性別を推定するために、この下顎骨の計測値を同じ奄美大島の弥生人女性骨である宇宿弥生人(松下, 1979), 徳之島の弥生人女性骨である面縄弥生人(松下・他, 1983)および沖永良部島の女性の縄文人骨と推定されている中甫縄文人(松下, 1984)と比較してみた(表3)。

表3 下顎骨計測値 (右, mm)

	長浜金久2号	宇宿 女性	面縄1号 女性	中甫1号 女性	浜郷			
					男性		女性	
					n	M	n	M
69(1) 下顎体高	32	29	27	30	16	31.75	10	29.00
69(2) 下顎体高	27	27	—	24	13	27.62	7	26.00
70(1) 前枝高	63	63	60	53	15	64.80	13	57.77
70(2) 最小枝高	52	55	50	43	17	53.12	12	47.67
71. 枝幅	32	33	30	33	18	35.50	12	33.92
71 a. 最小枝幅	31	33	29	33	17	35.00	12	33.75

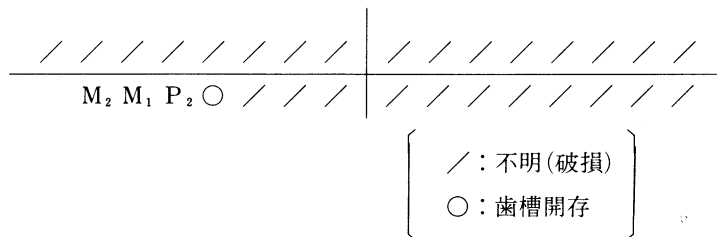
大部分の項目は面縄弥生人や中甫縄文人よりも大きく、同じ奄美大島の宇宿弥生人に最も近い。本地域の男性例としては、奄美大島の宇宿港遺跡(永井, 1981)および西之表市馬毛島の椎ノ木遺跡(中橋・他, 1980)出土の弥生人骨例があるが、いずれも下顎骨の計測値が公表されていないので、これらの人骨とは比較ができない。そこで地理的には遠くなるが、長崎県の五島列島の浜郷弥生人の成績(未発表)と比較してみた(表3)。本例の枝幅は浜郷弥生人男性骨より

も小さく、下顎枝や下顎体の高径についてもわずかに小さいもののほとんど大差ない。ところで、浜郷弥生人の値をみても、ここにあげた項目については男性の計測値は女性よりも大きく、また、女性の計測値を薩南諸島例と比較してみると、浜郷弥生人の女性の下顎骨は高さが低く、幅広いものであるが、宇宿・面縄弥生人のそれは高さが高く、幅もそれほど広くないことが分かる。すなわち、薩南諸島の弥生人女性の下顎枝は高さが高いという特徴が認められるようである。従って、宇宿弥生人女性下顎骨も浜郷弥生人男性下顎骨に近いわけで、本下顎骨の下顎枝の高径が高く、浜郷弥生人男性骨に近いからといって、本例は男性であるというわけにはいかない。やはり、本地域の男性骨の特徴が明らかにならない限り、性別を高い信頼度では推定できないが、現状で性別を推定するとすれば、宇宿弥生人女性骨に最も近いことを重視し、女性の可能性が強いと推定せざるを得ない。また、確かに下顎骨の計測値は宇宿弥生人に近いが、形態的にはどうか問題が残る。しかし、我々の手許にこの人骨がないので、このような点についても不明であり、研究をこれ以上進展させることができない。

次いで、この人骨の時代について検討しておきたい。この下顎骨には、下顎切痕がやや深いこと、角前切痕が存在し、しかもそれがやや深いこと、第三大臼歯が萌出する余地が全くないこと、また、頭蓋の骨壁がそれほど厚くないことなど縄文人骨の特徴が認められない。ただ下顎角は著しく外反しており、この点を当教室で保管している面縄弥生人、中甫縄文人と比較してみたが、いずれもこれほど外反してはいない。計測値的には最も近い、宇宿弥生人はどうか興味ある点であるが、上述しているとおり、手許に人骨がないので検討ができない。下顎角が外反しているということは、そしゃく筋との関係が強く、時代が新しくなっても下顎角が外反するものも存在する。従って、この下顎角の著しい外反のみで、時代の古さを決めることはできない。しかも、計測値は中甫縄文人よりもむしろ宇宿弥生人に近い。このようなことを考慮すると、この人骨は縄文時代人骨というよりは、むしろ弥生時代以降の人骨である可能性が高いようである。もとより、時代や時期は人骨から決められるものではなく、考古学的に決定されなければならないが、出土状況が明確でないような時は、今日までの形質人類学の成果を踏まえた人骨所見は、ある程度時代を決定する際の参考になるものではないかと考えている。

### (3) 歯

下顎骨には歯が釘植していた。その残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。



咬耗度は Broca の 2 度である。なお、M<sub>3</sub> は未萌出であるが、M<sub>3</sub> が萌出するスペースが存在しないので、おそらく先天的欠損と考えられる。

歯の計測値は表4に示すとおりである。

#### (4) 性別・年齢

性別については、下顎骨の項でも検討したが、今のところは高い信頼度で決定できないが、あえて推定するとすれば、女性の可能性の方が強いと考えている。年齢は歯の咬耗が弱いことから壮年と推定した。

### 3号人骨（男性、年齢不明）

右側上腕骨と両側の大腿骨を表面採集した。いずれの表面もげっし類の咬跡と思われる傷が無数についている。各骨の残存部分は図2に示しているとおりである。

#### 1. 上腕骨

右側骨体はやや太く、三角筋粗面の発達も比較的良好である。計測値は表5に示すように、中央最大径は23mm(右)、中央最小径は18mm(右)で、骨体断面示数は78.26(右)となり、骨体の扁平性は強くない。また、骨体最小周は68mm(右)である。

#### 2. 大腿骨

両側とも骨体は残存していた。骨体の径はそれほど大きいものではない。計測値は表6に示すように、骨体中央矢状径は26mm(右、左)、骨体中央横径は27mm(右)、26mm(左)で、骨体中央断面示数は96.30(右)、100.00(左)となり、骨体の後面には柱状性は認められない。中央周は83mm(右)である。また、上骨体断面示数は86.21(右)、83.33(左)となり、骨体上部には扁平性はほとんど認められない。

表5 上腕骨計測値 (mm)

5.	中央最大径 (右)	23
6.	中央最小径 (右)	18
7.	骨体最小径 (右)	68
6/5	骨体断面示数(右)	78.26

表6 大腿骨計測値 (mm)

	右	左
6.	骨体中央矢状径	26 26
7.	骨体中央横径	27 26
8.	骨体中央周	83 —
9.	骨体上横径	29 30
10.	骨体上矢状径	25 25
6/7	骨体中央断面示数	96.30 100.00
10/9	上骨体断面示数	86.21 83.33

#### 3. 性別・年齢

性別は、四肢骨の径がやや大きいことと筋付着部の発達が良いことから、男性と推定したが、年齢は不明である。

## 総 括

鹿児島県大島郡笠利町（奄美大島）大字和野字長浜金久にある長浜金久遺跡の1983年（昭和88年）に行われた発掘調査で、3体の人骨が発掘、採集された。このうちの2体が成人骨で、こ



の2体は散乱人骨、表面採集人骨である。人骨の残存量は少なかったが、人類学的観察や計測を行った。その結果を要約すれば、次のとおりである。

1. 2号人骨（散乱骨）は、頭蓋片および下顎骨の右半分が、3号人骨（表面採集骨）は右側上腕骨骨体および左右の大腿骨骨体が残存していた。
2. 2号人骨は縄文時代に属するものと推定されており、3号人骨は風葬骨の一部と考えられる。
3. 2号人骨は、どちらかといえば女性の可能性が強い、壮年骨であり、3号人骨は男性骨であるが、性別は不明である。
4. 2号人骨の下顎骨の計測値は宇宿弥生人女性下顎骨に近いものであった。
5. 九州における古人骨の研究は、その北部地域での研究が比較的進んでいるが、この地域の特徴をより明確にし、日本人の形質変化の中に正しく位置づけていくためには、この地域以外での研究も合せて進めていくことが必要である。とりわけ南西諸島を含めた南九州地域の形質は九州人の起原とも深くかかわっているものと考えられ、特に研究を重視しなければならない地域である。にもかかわらず、資料はあまり豊富とはいえない。2号人骨の下顎骨を検討していく過程で、薩南諸島の弥生人女性の下顎骨は西北九州弥生人女性に比べると下顎枝や下顎体の高径が高く、下顎枝の幅もそれほど広いものではないことが明らかになった。2号人骨にもこのような傾向が認められ、しかも同じ奄美大島の宇宿弥生人下顎骨の計測値に最も近いようである。また2号人骨の下顎骨は、下顎切痕が深く、角前切痕は明瞭で、しかもそれがやや深く、第三大臼歯が萌出する余地も全くない。また、頭蓋の骨壁がそれほど厚くないことなど縄文人骨の特徴が認められない。ただ下顎角が著しく外反しているが、これはそしゃく筋との関係が強いのでこれだけで時代の新旧を決めるわけにはいかない。以上の点を踏まえて、この人骨は弥生時代以降の人骨である可能性があることを形質人類学の立場から指摘しておきたい。また地理的に最も近く、保存状態も良好な宇宿弥生人骨が研究者の手許にないことは、研究の進展を防げており、下顎骨の形態や下顎角の様態あるいは筋附着部の様子などの検討を行うことができず、これ以上の考察は不可能であることも指摘しておきたい。

私は、以前古人骨に対する考え方や古人骨のおかれている問題点などについての考えを公けにしたことがある（松下、1982）。今回原稿を書くにあたってまた、同じような問題に直面したので、改めて古人骨に対する考え方を明らかにしておきたい。

まず、お願いしたいのは、古人骨（人骨）は人骨研究者のもとに保管、管理させて欲しいということである。その第1の理由は、①古人骨といえども、人体の一部であり、遺骨であるからである。「歴史民俗資料館」や「教育委員会の事務所」などに、もし現代人骨が置かれていたらどうであろうか。もっともそんなことがおきるはずはないが、そのような場所が人体の一部を置くのにふさわしい場所でないことははっきりしている。人体の一部が粗末に取り扱われていいわけがない。形質人類学は、人間（ヒト）そのものを研究資料とし、人間

(ヒト)の形態的特徴を明らかにし、正しい人間観を確立する学問である、と私は考えている。人間(ヒト)そのものを研究資料とするがゆえに、最も人間を大切にすることを必要であるはずである。この基本的態度が人骨研究の基本的出発点と、私は考えている。それは私達の共通の祖先の遺骨に対しても全く同じである。人間を大切にすることを、その人骨が「自分の近親者の遺骨」という考え方をすればおのずから理解していただけるであろう。

考古学は人類が残した遺物、遺跡を研究対象とし、人類の生活全体を復元し、人類の歴史を解明するとともに、正しい歴史観を確立することを目的とするものと、私なりに解釈している。人間の歴史である。そこには、やはり人間が基本にあるはずで、そうすればやはり人間を大切にすべきである。こういう観点からは、人骨を「歴史民俗資料館」に展示したり、「倉庫」などに保管するという発想は出てこないと思う。こういう発想がおきるのは、背後に古人骨は遺物の一種であるという考えがあり、考古遺物と一緒に出土するものおよび遺跡や土中から出土するものはすべて遺物であるという考え方から生じており、その結果、古人骨を考古遺物と同列視してしまい、これらと同じように、陳列、展示するという発想が生じている。そこに人間の遺骨であるという観点は欠落してしまっている。確かに、古いという点や研究対象であるという点では考古遺物と同じ特質をもっているが、その属性から考古遺物と同列視するわけにはいかないし、医学教育に携わる立場から、その考え方に同意するわけにはいかない。また、第2の理由は、②古人骨は、出土例が少なく、同時に人骨研究者にとっては必要不可欠なものであるからであり、形質人類学の研究対象になる以上、それは学問的に正しく研究が続けられるべきものであるからである。考古遺物とは異なり、人骨は条件がよほど良くない限り残存しないし、その量は考古遺物とは比べものにならない。人骨がなければ、人骨研究は一步も進展しないのである。わずか1体でも、骨片でも貴重で大切な資料である。古人骨が「歴史民俗資料館」に展示されたとしても、それは「客寄せの手段」にはなるかもしれないが、その人骨の形質人類学的研究の発展はあり得ないし、倉庫などに保管された場合は「死蔵」ということにもなりかねない。学問は時とともに進歩発展していく。研究過程の中で、計測方法や研究視点を変えて再検討をおこなう必要が生じたり、新たな資料が増えれば、これとも比較検討しなければならなくなる。しかし、資料がいつでも研究できる状態にないとすれば、研究の進展は防げられ、その結果、それがたとえ貴重な資料であっても、研究資料として使えなくなり、最終的には研究史上からもその資料は消滅していくことにもなりかねない。

いうまでもなく、古人骨は人骨研究者だけのためにあるとは思ってもいけない。しかし、まず研究者が研究を行い、その結果(成果)を地元へ還元していくというのが順序であろう。資料が正しく研究されてこそ、その資料は正しく地元でも生かされるはずであり、ただ展示してさえおけばいいといったものではないはずである。視覚的效果だけの問題なら、レプリカを活用すればいいし、現在の技術は本物と変らないものが作れるのである。また、報告書が刊行されれば、研究が終了したと考えられがちであるが、報告書ができ上がった時点が人骨研

究の出発点であり、それから初めて、本格的な研究を始めることができるのであり、報告書完成はその準備が整ったことを意味しているにすぎない。そして、我々は研究させていた研究者として、その学問的成果を地元へ還元・普及するためのいかなる努力も惜しむつもりはない。また、研究させてもらう以上、それからおこるどのような責任も義務もいささかも回避するつもりはないことを言明しておきたい。第3の理由は、③人骨はこわれやすく、常に手入れが必要だからである。そして、その管理維持には専門的知識が必要であるからである。

以上のような理由から、私は、人骨は人骨研究者の手元で保管・管理していた方がよいと考えている。研究を真剣に行なおうとすればする程、このような困難に直面し焦りを感じる。私はこれからも人骨研究を続けていきたいと思っている。だから、誤解を恐れず、考えていることを書いてみた。考古学と人類学のお互いの発展と進歩のために議論すべきは議論し、そして理解し合っていきたいと思うし、またそれはお互いの叡智を出し合えば必ず可能なことだと信じている。

今後ともこれまで以上に、人骨研究に対して、深いご理解とご協力を賜りたいと心から熱望している。

《攔筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた、笠利町教育委員会、鹿児島県教育庁文化課の諸先生方ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

## 参 考 文 献

1. 藤田恒太郎, 1949: 歯の計測規準について, 人類学雑誌, 61: 27—32.
2. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart: 429—597.
3. 松下孝幸, 1979: 宇宿貝塚出土の人骨。鹿児島考古, 13: 210—220.
4. 松下孝幸, 1982: 九州・山口地域における古人骨研究の課題と問題点。考古学ジャーナル, 212: 18—21.
5. 松下孝幸, 石田肇, 1983: 鹿児島県伊仙町面縄第1貝塚出土の弥生時代人骨。面縄第1・第2貝塚(伊仙町埋蔵文化財調査報告書1): 51—64.
5. 松下孝幸, 1984: 鹿児島県知名町(沖永良部島)中甫洞穴出土の人骨。中甫洞穴(鹿児島県知名町埋蔵文化財調査報告書): 33—58.
6. 中橋孝博, 永井昌文, 1980: 椎ノ木遺跡出土人骨について。馬毛島埋葬址: 24—34.
7. 永井昌文, 1981: 宇宿港遺跡出土の人骨について。宇宿港遺跡: 30—32.

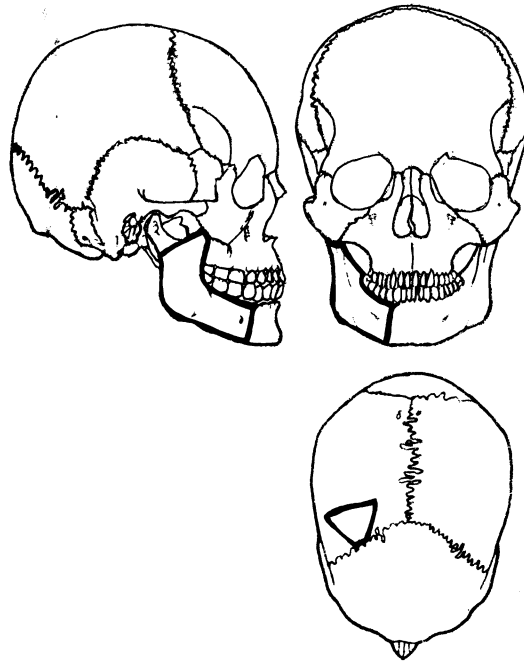
Human Skeletal Remains excavated from Nagahamakaneku Site, Amamiōsima Island, Kagosima Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA

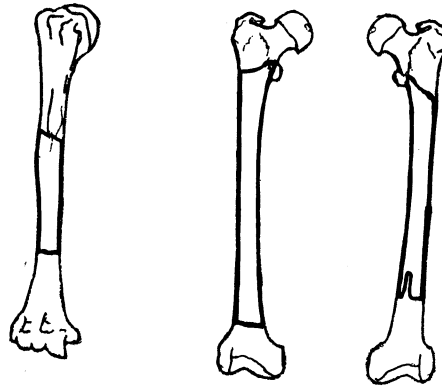
(Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University)

In 1983, Human skeletons excavated from Nagahamakaneku site, Kasari-chō (Amamiōsima), Kagosima Prefecture, are 3 individuals. No 1 is a child, 15 years old, belongs to the early phase of Yayoi period. No 2, a fragment of the parietal bone and the right side of the mandible, belongs to Jomon period. No 3, male skeleton, the right humerus, the both femur, was gathered at the surface of the site. The measurements of No 2 is close to that of Usyuku.

図2 人骨の残存状態



2号人骨残存状態



3号人骨残存状態

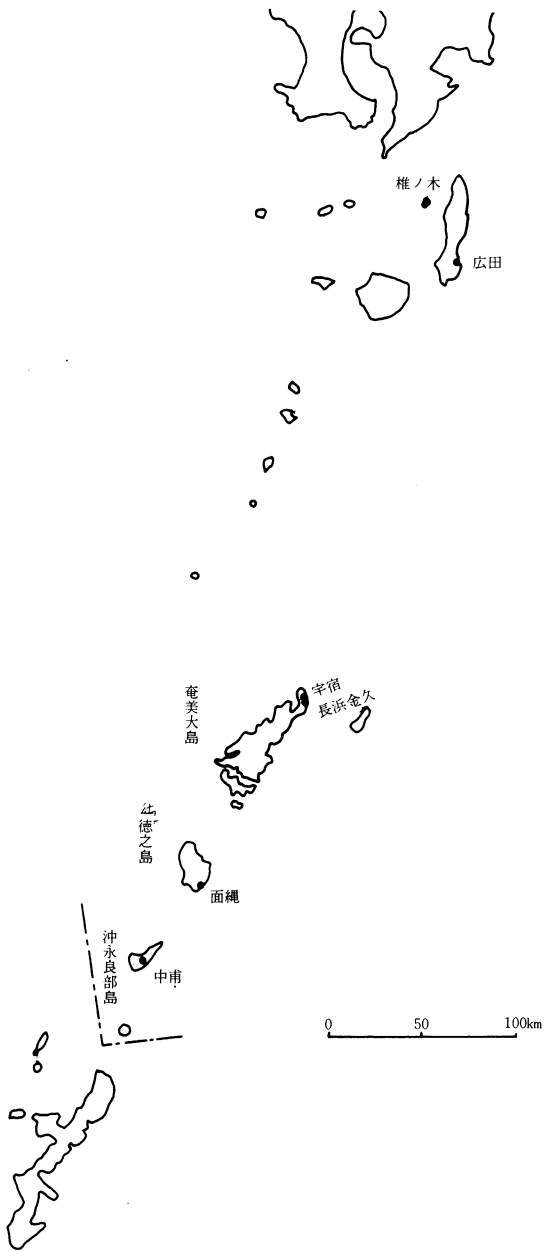


図1 遺跡



2号人骨(性別不明・壮年)

## 5. 長浜金久遺跡出土の動物骨

松元 光春・西中川 駿

(鹿児島大学農学部)

### 1. はじめに

長浜金久遺跡<sup>2)</sup>は、鹿児島県大島郡笠利町万屋長浜金久にあり、新奄美空港の建設に伴い鹿児島県教育委員会により調査発掘され、海岸側の第Ⅰ貝塚(奈良～平安)と山手側の第Ⅱ貝塚(縄文後期)の二ヶ所からなる。今回、出土した自然遺物のうち、貝類を除く動物骨について同定を依頼されたので、その結果の概要をここに報告する。

### 2. 出土骨の概要と考察

自然遺物の動物別および区画別出土骨量は表1に、そのうち哺乳類の骨格別および動物別出土骨片数は表2に、それぞれ第Ⅰ、第Ⅱ貝塚まとめて示した。なお、後述するように埋葬されたと推定されるウシ1頭分の骨格については表に含まれていない。

第Ⅰ貝塚の自然遺物の総重量は2,118.2gあり、そのうち哺乳類448.0g、爬虫類(ウミガメ類)1,678.9g、魚類54.3gである。哺乳類のうち、動物種と骨の種類を同定できたものは39骨片、441.7gで、動物種はイノシシ、ウシ、イヌの2目3種である。第Ⅱ貝塚では、総重量633.1gで、そのうち、哺乳類273.2g、爬虫類(ウミガメ類)318.3g、魚類41.6gである。哺乳類のうち、動物種と骨の種類を同定できたものは19骨片、268.8gで、動物種はイノシシ、クジラ類の2目2種である。以下、各動物別に述べる。

イノシシの出土骨(図版Ⅰ, 1～9, 27～34)は第Ⅰ貝塚から31、第Ⅱ貝塚から18骨片がそれぞれ出土し、最小推定個体数は各々3、2体である。長骨や頭蓋は切断されており、また、焼けている骨や幼獣の骨もみられる。各骨の形状は現生のリュウキュウイノシシに類似し、県本土に生息するイノシシより小さい。さらに、下顎骨の形態的特徴<sup>1)</sup>から、リュウキュウイノシシと同定できよう。ウシ(図版Ⅰ, 15)は中足骨が1個出土しており、口之島野生牛の雄と同程度の大きさであるが、刀傷がみられる。イヌ(図版Ⅰ, 10～14)は上顎骨、尺骨など7個の出土で2個体と推定され、大きさは柴犬より大きく、ビーグル犬程度の大きさである。橈骨は焼かれている。クジラ類(図版Ⅰ, 35)は胸椎1個で、骨端線が完全に消失していることから成獣のもので、その保存長×幅×高は48.5×74.1×49.5(mm)である。

爬虫類はウミガメ類(図版Ⅰ, 16～24, 36～37)で、第Ⅰ、第Ⅱ貝塚とも哺乳類の出土量を上回っており、背甲、腹甲の骨板が多く、歯骨、上腕骨、腸骨、坐骨などもみられる。また、焼けている骨もみられる。

魚類(図版Ⅰ, 25～26)はバラ、ブダイなどの咽頭骨、歯骨などがみられる。詳細は専門家に委ねたい。

第Ⅰ貝塚のJ-24, K-25, 26, L-25, 26区から出土した132個のウシの骨は、1頭分の全身骨格がほぼ揃って出土しており、また、骨の保存状態も壊れやすい頭蓋が完形であるなど良好である(図版Ⅱ参照)。このウシは頭蓋や寛骨の形態から雄で、歯の磨耗度から約6才と推定される。頭蓋の最大長 501.0mm, 基底長 430.2mm, 頬骨間幅 201.5mmで現代黒毛和牛の雄より小さく、日本在来牛である口之島野生牛の雄よりわずかに大きい。なお、右角突起は生前に断角されているが、それ以外に骨には刀傷などの痕跡は全くみられない。以上の点や出土状況などから、このウシは比較的新しい時期に何らかの原因で斃死後埋葬されたと考えた方が妥当であろう。

以上、長浜金久遺跡出土の動物骨、とくに哺乳類の骨を中心に述べたが、これまでの奄美大島の遺跡<sup>3-5)</sup>と同様に、第Ⅰ, Ⅱ貝塚とも哺乳類では量的には少ないがイノシシが多くみられ、シカは全くみられない。また、第Ⅰ貝塚は奈良・平安期に当り、この地方の動物相の時代的変遷を知る上で貴重である。

### 3. 要 約

長浜金久第Ⅰ, Ⅱ貝塚出土の自然遺物のうち、貝類を除く動物骨の調査を行った。

- (1) 第Ⅰ貝塚の動物骨の総重量は 2,118.2g で、それらは哺乳類(イノシシ, ウシ, イヌ), 爬虫類(ウミガメ類), 魚類(ベラ, ブダイ)などのものである。
- (2) 第Ⅱ貝塚では総重量 633.1g で、それらは哺乳類(イノシシ, クジラ類), 爬虫類(ウミガメ類), 魚類(ベラなど)のものである。
- (3) 第Ⅰ貝塚出土の雄牛の骨は、比較的新しい時期に埋葬された可能性が高い。

### 参考文献

1. 今泉吉典：琉球列島産イノシシの分類学的考察, 国立科博専報, 6, P.113—129(1973)
2. 鹿児島県教育委員会：長浜金久遺跡, P. 1—45 (1984)
3. 笠利町教育委員会：サウチ遺跡, P. 65—66 (1978)
4. : 宇宿貝塚, P. 95—96 (1979)
5. : あやまる第2貝塚, P. 62—65 (1984)

### 図版の説明

図版Ⅰ 1～26：長浜金久第Ⅰ貝塚, 1～9：イノシシ, 10～14：イヌ, 15：ウシ, 16～24：ウミガメ類, 25～26：魚類(ベラ),

1. 頭蓋(側頭骨, 左), 2. 下顎骨(雌), 3. 下顎骨(幼獣), 4. 上腕骨(幼獣), 5. 第四指中節骨(右), 6. 寛骨(右), 7. 大腿骨(幼獣, 左), 8. 踵骨(左), 9. 距骨(右), 10. 上顎骨(左), 11. 下顎骨(左), 12. 軸椎, 13. 橈骨(左), 14. 尺骨(右), 15. 中足骨(左), 16. 歯骨, 17. 前烏口骨・肩甲骨(右), 18. 上腕骨(右), 19. 腸骨(左), 20. 坐骨(左), 21. 恥骨(右), 22. 大腿骨(右), 23. 24. 背甲骨, 25. 上咽頭骨, 26. 下咽頭骨。



27～36：長浜金久第Ⅱ貝塚 27～34：イノシシ，35：クジラ類，36～37：ウミガメ類，

27. 下顎骨(雄，右)，28. 肩甲骨(右)，29. 上腕骨(右)，30. 尺骨(右)，31. 寛骨(右)，  
32. 大腿骨(右)，33. 距骨(右)，34. 第三中足骨(左)，35. 胸椎，36. 烏口骨(左)，37. 腹甲  
骨板

**図版Ⅱ** 長浜金久第Ⅰ貝塚出土のウシ

1. 頭蓋(背面)，2. 同(底面)，3. 同(右側面)，4. 下顎骨(左)，5. 頸椎，6. 胸椎，  
7. 腰椎および仙骨，8. 肋骨(左)および胸骨柄，9. 前肢骨(左)，10. 後肢骨(左)

表1 動物別および区画別出土骨量

(g)

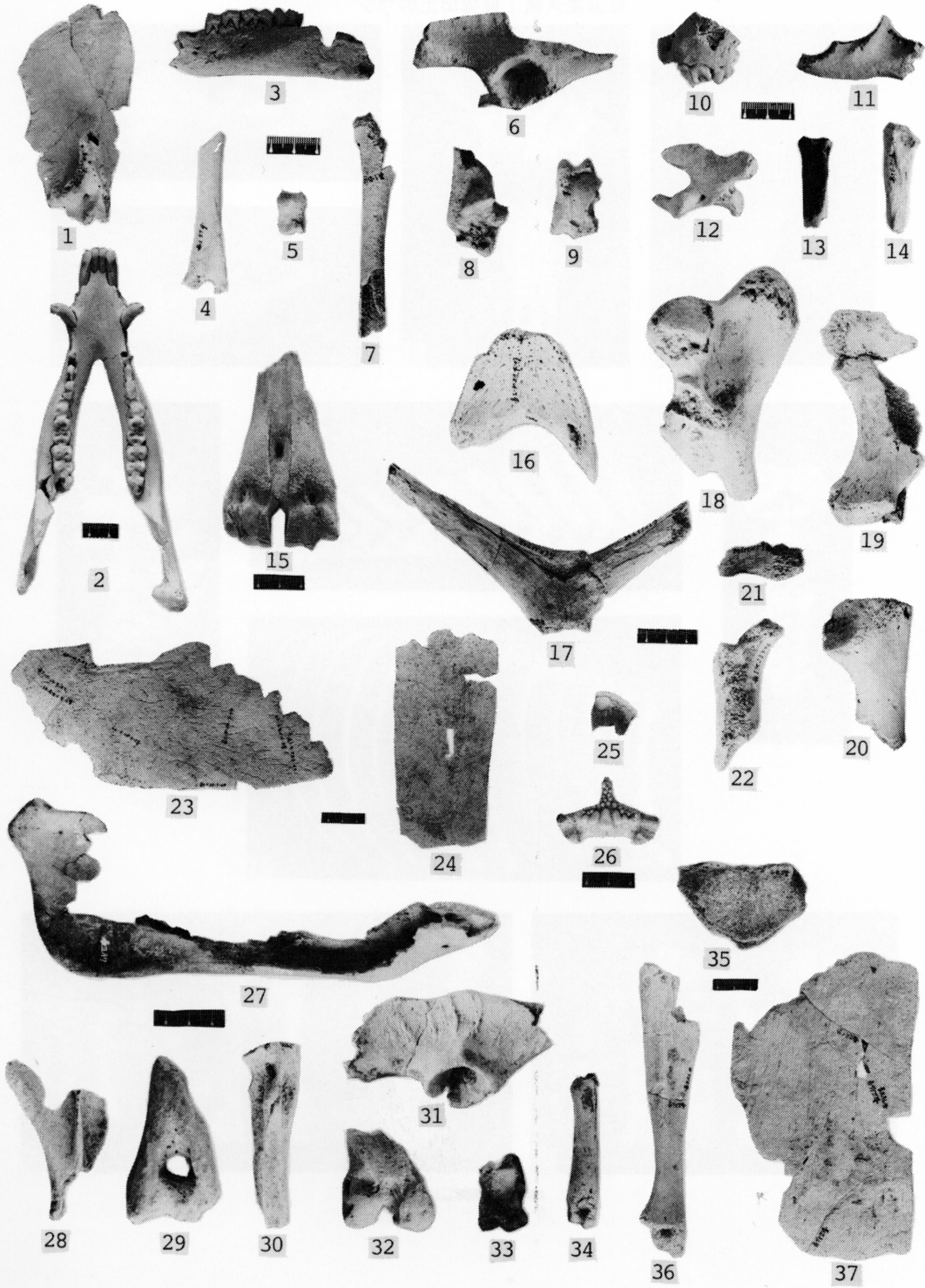
	区画	層	イノシシ	ウシ	イヌ	クジラ類	カメ類	魚類	不明骨	区画別出土骨量
I	B	?	18.5 (3)		12.3 (3)		41.9 (6)	0.8 (1)		73.5 (13)
	C	?			2.3 (1)		17.7 (3)	0.8 (1)	1.9 (1)	22.7 (6)
	ABC	?	3.4 (1)				9.7 (1)			13.1 (2)
	D	?	6.2 (1)				3.5 (1)			9.7 (2)
	F	最下	9.4 (1)					6.5 (3)		15.9 (4)
	G	?	128.6 (11)		9.8 (3)		22.3 (11)	3.4 (2)		164.1 (27)
	I	最下						6.8 (2)		6.8 (2)
	J	?	3.3 (1)							3.3 (1)
	〃	V	37.4 (7)				14.2 (3)	18.8 (23)		70.4 (33)
	K	?					16.1 (6)	1.0 (1)		67.1 (7)
	〃	下					1,417.5 (79)	1.0 (2)		1,418.5 (81)
	〃	最下	6.9 (1)						3.1 (1)	10.0 (2)
	L	最下	133.0 (1)							133.0 (1)
	?	?	2.9 (4)	67.7 (1)			86.0 (20)	15.2 (11)	1.3 (1)	173.1 (37)
	動物別出土骨量		349.6 (31)	67.7 (1)	24.4 (7)	0	1,678.9 (130)	54.3 (46)	6.3 (3)	2,181.2 (218)
II	A	?	80.1 (10)				251.9 (23)	1.3 (1)	3.1 (3)	336.4 (37)
	B	?	57.4 (5)			91.2 (1)	13.0 (3)			161.6 (9)
	?	表					1.3 (1)			1.3 (1)
	?	住居趾外	12.3 (2)				52.1 (14)	27.7 (8)	1.3 (1)	93.4 (25)
	?	?	27.8 (1)						12.6 (1)	40.4 (2)
	動物別出土骨量		177.6 (18)	0	0	91.2 (1)	318.3 (41)	41.6 (10)	4.4 (4)	633.1 (74)

( ) は骨片数を示す

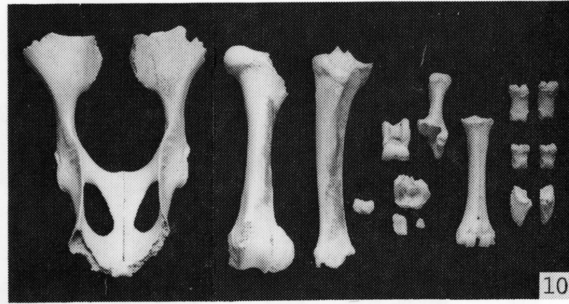
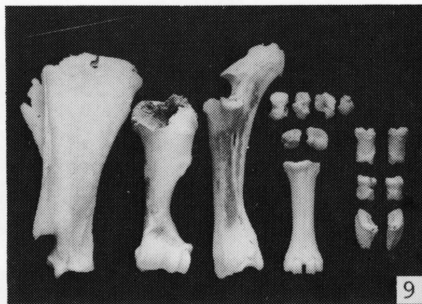
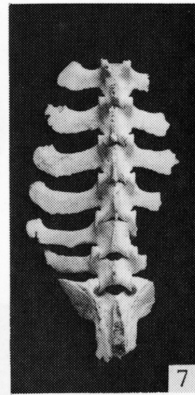
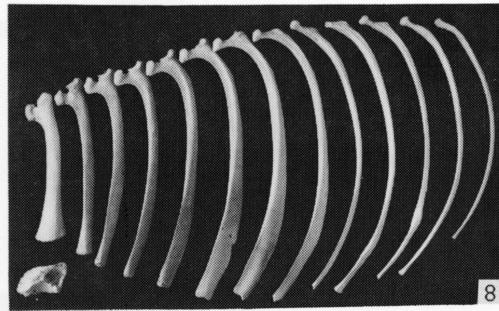
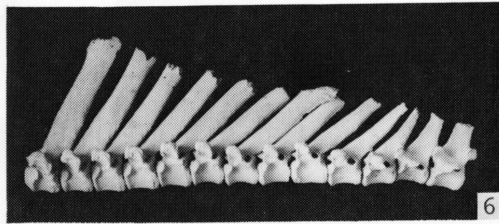
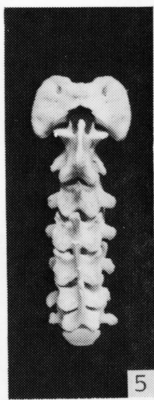
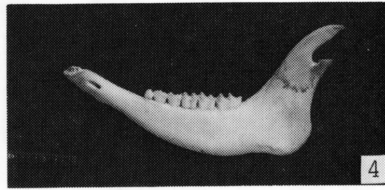
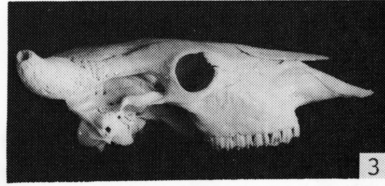
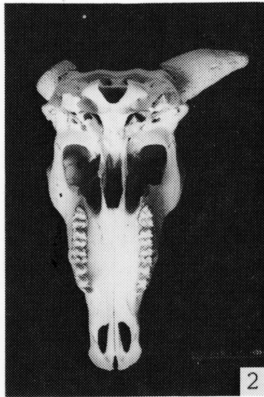
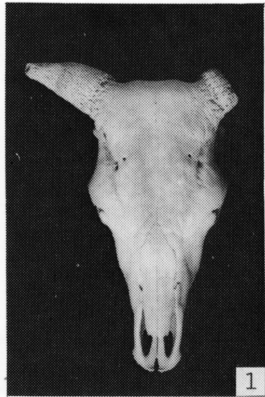
表2 骨格別および動物別出土骨片数

動物名	骨名			胴骨					前肢骨				後肢骨					動物別出土骨片数								
	頭蓋骨	下顎骨	歯	頸椎	胸椎	腰椎	仙椎	尾椎	肋骨	胸骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中手骨	指骨		寛大腿骨	大腿骨	脛骨	腓骨	膝蓋骨	足根骨	中足骨	趾骨
I	イノシシ	4	6	1		1		1	2		2	3	1			1		4	2			3				31
	ウシ																						1			1
	イヌ	2	1		1								1	2												7
	骨格別出土骨片数	14			5					10				10					39							
II	イノシシ	1			1						2	1	1	2		1		2	2	2			1	2		18
	クジラ類				1																					1
	骨格別出土骨片数	1			2					7				9					19							

長浜金久第 I・II 貝塚出土動物骨



長浜金久第Ⅰ貝塚出土のウシ



0 30cm

## 6. 長浜金久遺跡出土魚骨および甲殻類鉗脚について

四宮明彦・鈴木広志・久保田裕一

(鹿児島大学水産学部)

今回、鹿児島県教育文化課より、同定依頼を受けた「長浜金久遺跡」出土の魚骨および甲殻類鉗脚について、第1～3表のように鑑定した。

### I 魚骨

魚骨とみなされる200個以上の標本のうち、科・属または種のレベルまで同定できたものは以下の通りであった。

1. タイ科 Sparidae のうちクロダイ属 *Acanthopagrus* とみられるものの顎骨。
2. ベラ科 Labridae の多くの種を含む顎骨および咽頭骨。
3. ブダイ科 Scaridae のうちキツネブダイ属 *Scarus* の多くの種を含む咽頭骨。これらには種まで同定のできたナガブダイ、ナンヨウブダイ、イチモンジブダイが含まれる。
4. フェフキダイ科 Lethrinidae の顎骨。
5. ハリセンボン科 Diodontidae の顎骨。

およびイシガキフグ属 *Chilomycterus* の棘状鱗。

以上に述べた魚類は、現在も浅海のサンゴ礁域に普通に見られる種である。

### II 甲殻類鉗脚

今回同定依頼を受けた出土標本中には、約40個の甲殻類鉗脚（はさみ脚）の不動指先端が含まれていた。これらのうち、比較的によく原形を留めていたものについて、科または種のレベルまで同定し、以下に示した。

1. ワタリガニ科 Portunidae のノコギリガザミ、および同科不明種タイプAおよびB。
2. オウギガニ科 Xanthidae のイワオウギガニ、および同科不明種タイプA。

ノコギリガザミ、イワオウギガニは現在もサンゴ礁域にみられる大型種であり、特に前者は、食用種として知られる。

### III その他の海産生物

ナガウニの殻板（1個体完全標本）とウニ類不明種の殻板（かなり大型種）、およびウニ類不明種の大棘（約20本）が含まれていた。ウニ類不明種は食用に供されたと考えられるが、ナガウニのこの個体に限っては、むしろ食べなかったために、殻板が完全な形態で出土する結果となったようである。

表 1. 長浜金久 I 出土魚骨

	フダイ科				ベラ科				ハリセンボン科		フエフキダ イ科		タイ科				スズキ亜目						
	pm	d	up	lp	pm	d	up	lp	pm(d)	ss	pm	d	pm	m	d	ar	pm	m	d	ar	pop	d	
長 I-B-15-12	3	3	3	1																			
-G-5-7	3	3	3	1									2		2								2
-D-16-7				1																			
-C-15-14																							
-G-2-6									1														
-G-3-9																	1					2	1
-C-14-14																							1
-B-8-13																							
-B-5-3												1											
-B-13-8																							1
-C-14-15									3		1												2
-B-7-11																							
-C-14-8																							1
-B-14-4				1																			1
-ABC一般				1		1	1		1		1						2				1		1
-G-5-6																							1
-D-13-7																							1
-C-11-2																							
-D-13																							
-B-6-5																							
-D-13-3																							
-G-4																							
-C-11-7																							
-D-13-5																							1
-B-7-8																							
-C-11-12																							1
-1																							2
-2	1																						2
-C-14-2							1																1
-L- <sup>29</sup> / <sub>30</sub> -51																							1
-J-24																							8
-K-27																							
-B-8-14				1																			
-G-4-12																						1	
-C-16-16																							2
-C-15-16																							1
-B-6-8																							1
-E-15-6																							1
-C-11-6																							1
-B-7-15																							1
-B-15-14																							1
合計	4	4	5	10	2	1	0	3	19	10	1	1	2		4	3				2	2	2	1

不 明 種													
pm	m	ar	ps	ceh	v	sr	ceb	g	u	lae	bab	te	hym
	3				7	1	2	1					
	2		3						1	1	1		
1					2								
		1			2	2	2						
			1										
								1					
5					9	2	4	2	1	2		1	
					2								
					1								
					2								
					2								
					1								
1													
									1				
					1								
													1
		1			3								
					1								
						1							
							1						
0	1	11	2	1	3	33	6	9	4	3	3	1	2

pm: 前上顎骨, d: 齒骨, up: 上咽頭骨  
lp: 下咽頭骨, ss: 棘狀鱗, ar: 關節骨,  
pop: 前鰓蓋骨, ps: 副楔骨, ceh: 角舌骨  
v: 脊椎骨, sr: 鱗棘, ceb: 角鰓骨, q: 方骨  
u: 尾舌骨, lae: 側篩骨, bab: 基鰓骨,  
te: 齒, hym: 舌額骨



第2表 長浜金久Ⅱ出土魚骨

	ブダイ科				ベラ科				ハリセンボン科		フエフキダイ科		タイ科				pr
	pm	d	up	lp	pm	d	up	lp	pm(d)	ss	pm	d	pm	m	d	ar	
長Ⅱ-A-4																	
-A-7			1					1							1		
-B-5								1									
-B-6	2										1						
-B-7		3		1	2			1									
長Ⅱ一般		1															
合計	2	4	1	1	2	0	0	2	1	0	0	1	0	0	1	0	

第3表 長浜金久遺跡出土甲殻類鉗脚

	ワタリガニ科			オウギガニ科	
	ノコギリガザミ	不明種タイプA	不明種タイプB	イワオウギガニ	不明種タイプA
長ⅠABC一般		1			1
C-12-16		1			
C-14-15		2			1
E-15-12		1			1
G-5-7		1		4	2
C-14-12				2	
C-14-8				1	1
B-14-4				1	
B-14-7					1
C-16-11					1
C-11-12					1
A-15-14					1
長Ⅰ一般				1	
長Ⅱ-A-5		1	1		
A-7	6	1			
長Ⅱ一般				2	
合計	6	8	1	11	10

不明種																
d	pm	m	ar	ps	ceh	v	s	r	ceb	q	u	lae	bab	te	hym	
						1										
1	2				1	7	3								2	記号は第1表 に同じ
2		1				1	1								1	
	1					1	1									
3	3	1	0	0	1	10	5	0	0	0	0	0	0	0	3	

不明種
1
1
1
3

## 7. 長浜金久遺跡出土貝類について

行田義三  
(宮之城中学校教諭)

長浜金久第Ⅰ・第Ⅱ遺跡から出土した貝類は、第1表、第2表の通り49科126種(腹足綱30科95種、斧足綱19科31種)である。

出土したこれらの貝類の中で、マングローブシジミ以外はすべて遺跡付近に現生している。マングローブシジミは、これまでレンナシジミとされていたが、昭和52年(1977)発行、波部忠重著『日本軟体動物分類学、二枚貝綱／堀足綱』P.238においてシレナシジミの学名が *Geloina papua* (Lesson) から *Geloina coaxans* (Gmelin) に変更となり、同時に和名もマングローブシジミに改称された。マングローブシジミはマングローブ(ヒルギ等の群生林)地帯に分布し、奄美大島では住用村山間の役勝川河口に生息地があるのみである。

これまでリュウキュウヒバリ *Modiola pulmescens* Dunker と称せられた貝は、シレナシジミ同様、波部(1977)によってヒバリガイ *Modiola (Modiola) auriculatus* (Krauss) のシノニム(同物異名)とされた。

出土した貝類の多くは食用とされたがハシナガツノブエ、ホウシュノタマ、ホソスジウズラタマキビ、ノシガイ、陸産のオオシマヤマタニシ、オオシマケマイマイ、オキナワウスカワマイマイ、パンダナマイマイ、淡水産のトウガタカワニナ等は貝が小さく食用にされたとは考えられない。

第Ⅱ遺跡出土の貝の表面の砂は固着しておりそのまま写真撮影をした。

図版の写真番号は第1表、第2表の和名番号と一致している。

第1表 長浜金久第Ⅰ遺跡出土貝類一覧

番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
	腹足綱(巻貝)		6	ニシキウズ	紀伊以南
			7	ムラサキウズ	紀伊以南
	※ツタノハ科		8	ダルマサラサバテイ	奄美以南
1	ツタノハ	房総以南	9	サラサバテイ	奄美以南
2	オオベッコウガサ	奄美以南	10	ギンタカハマ	房総以南
	※ミミガイ科			※リュウテン科	
3	ミミガイ	四国以南	11	チョウセンサザエ	奄美以南
4	イボアナゴ	紀伊以南	12	コシタカサザエ	房総以南
	※ニシキウス科		13	ヤコウガイ	奄美以南
5	オキワイシダミ(第Ⅱにも出土)	奄美以南	14	リュウテン	奄美以南
			15	タツマキサザエ	紀伊以南

番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
16	カンギク	奄美以南		<b>※タマガイ科</b>	
	<b>※アマガイモドキ科</b>		34	ホウシュノタマ	房総以南
17	アマガイモドキ	四国以南	35	リスガイ	紀伊以南
	<b>※アマオブネ科</b>			<b>※フジツガイ科</b>	
18	イシダミアマオブネ	九州南部以南	36	シロシノマキ	奄美以南
19	キバアマガイ	四国以南	37	シノマキ	紀伊以南
20	アマオブネ	房総以南	38	ミツカドボラ	紀伊以南
21	ニシキアマオブネ	四国以南	39	シオボラ	紀伊以南
	<b>※タマキビ科</b>		40	ホラガイ	紀伊以南
22	ホソスジウズラタマキビ	紀伊以南		<b>※トウカムリ科</b>	
	<b>※ムカデガイ科</b>		41	カンコガイ	房総以南
23	リュウキュウヘビガイ	国国以南		<b>※オキニシ科</b>	
	<b>※オニノツノガイ科</b>		42	オキニシ	房総以南
24	カヤノミカニモリ	房総以南	43	オオナルトボラ	房総以南
25	オニノツノガイ	紀伊以南		<b>※ヤッシロガイ科</b>	
	<b>※スイショウガイ科</b>		44	ウズラガイ	房総以南
26	マガキガイ	房総以南		<b>※アクキガイ科</b>	
27	クモガイ	紀伊以南	45	ガンゼキボラ	房総以南
28	ラクダガイ	奄美以南	46	ウネレイシダマシ	房総以南
29	スイジガイ	紀伊以南	47	イイシダマシレ	四国以南
	<b>※タカラガイ科</b>		48	アカイガレイシ	紀伊以南
30	ハナビラダカラ	房総以南	49	ツノレイシ	紀伊以南
31	ハナマルユキ	房総以南	50	シラクモガイ	九州南部以南
32	ヤクジマダカラ	房総以南	51	テツレイシ	紀伊以南
33	ホシダカラ	紀伊以南	52	コイワニシ	四国以南
			53	テツレイシモドキ	四国以南

番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
54	※カブラガイ科 カブトサンゴヤドリ	紀伊以南	72	※オナジマイマイ科 オキナワウスカワマイマイ	奄美以南
55	※ ※イトマキボラ科 イトマキボラ	四国以南	73	バンダナマイマイ	奄美以南
56	ツノキガイ	紀伊以南		淡水産	
57	リュウキュウツノマタ	紀伊以南	74	※トウガタカワニナ科 トウガタカワニナ	奄美以南
58	※マクラガイ科 ホソコモンマクラ	奄美以南		腹足綱26科74科	
59	※オニコブシ科 オニコブシ	奄美以南		斧足綱(二枚貝)	
60	コオニコブシ	紀伊以南	75	※フネガイ科 エガイ	房総以南
61	※イモガイ科 サラサミナシ	紀伊以南	76	ベニエガイ	房総以南
62	アカシマミナシ	四国以南	77	リュウキュウサルボウ	奄美以南
63	ゴマファイモ	四国以南	78	※イガイ科 ヒバリガイ	紀伊以南
64	イボシママイモ	房総以南		※マクガイ科 シロアオリ	房総以南
65	クロフモドキ	奄美以南	79		
66	ヤナギシボリイモ	紀伊以南	80	※ウミギク科 ミヒカリメンガイ	四国以南
67	クロザメモドキ	四国以南		※ツキガイ科 ツキガイ	紀伊以南
68	ジュズカケサヤガタイモ	紀伊以南	81		
69	マダライモ	紀伊以南	82	※カゴガイ科 カゴガイ	奄美以南
70	※カラマツガイ科 コウダカカラマツ	四国以南	83	※キクザル科 ケイトウガイ	房総以南
71	陸産 ※ヤマタニシ科 オオシマヤマタニシ	奄美大島 徳之島			

番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
84	※トマヤガイ科 クロフトマヤ	紀伊以南	91	※チドリマスオ科 イソハマグリ	房総以南
	※イタボガキ科 カキの1種			92	※ニッコウガイ科 サメザラ
85	※ザルガイ科 カワラガイ	四国以南	93		モチヅキザラ
	※シャコガイ科 ヒメジャコ	紀伊以南	94	※シオサザナミ科 リュウキュウマスオ	紀伊以南
88	ヒレジャコ	奄美以南		95	※マルスダレ科 ヌノメガイ
89	シラナミ	紀伊以南	96		アラヌノメ
90	※バカガイ科 リュウキュウバカガイ	紀伊以南	97	マルオミナエシ	紀伊以南
			98	ホソスジイナミガイ	紀伊以南
			99	アラスジケマンガイ	奄美以南
				斧足綱 16種 25種 科	

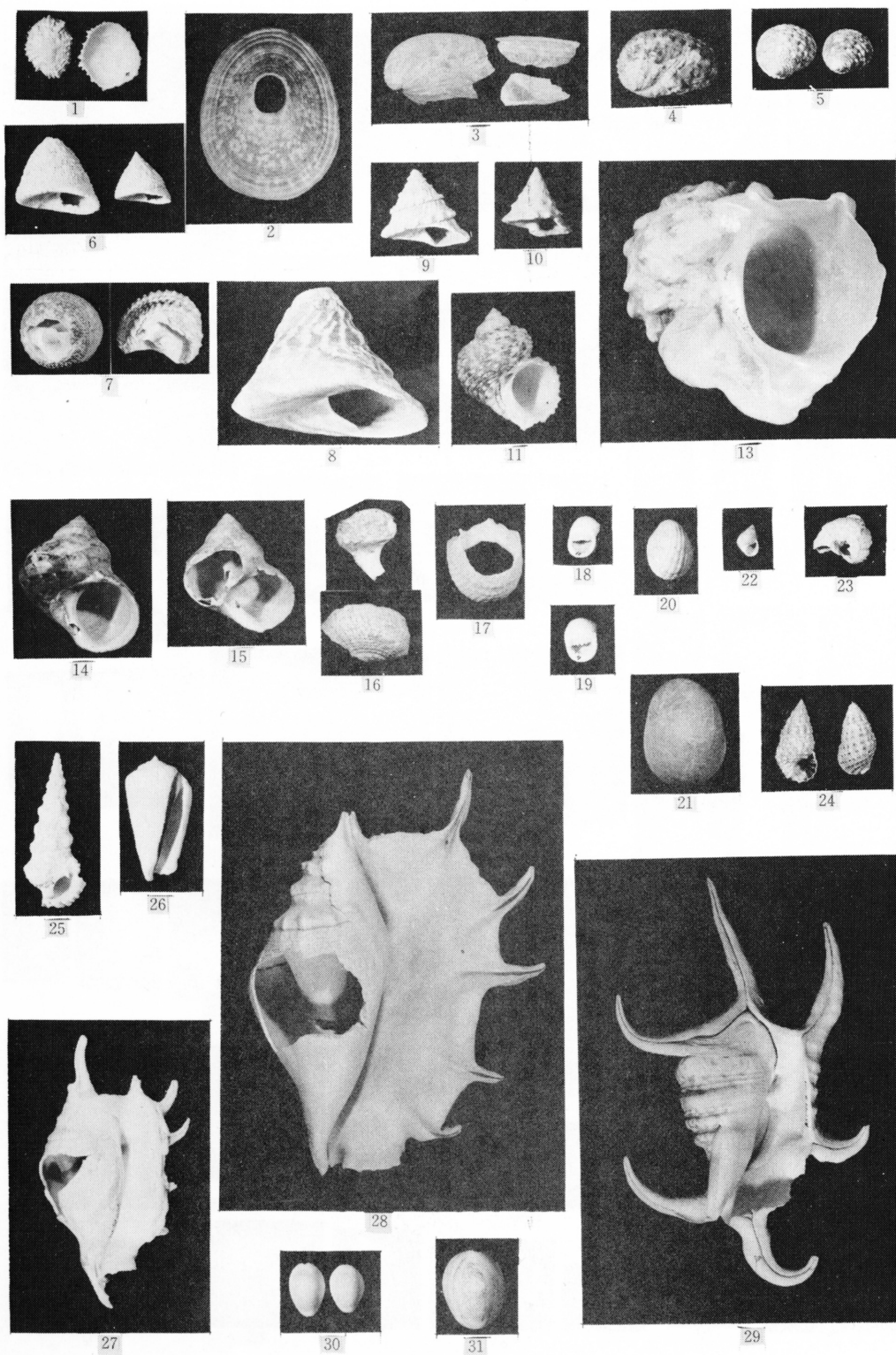
第2表 長浜金久第II遺跡出土貝類一覧

番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
100	腹足綱(巻貝)		106	※ニシキウズ科 ニシキウズ	紀伊以南
	※ユキノカサ科 リュウキュウウノアシ	奄美以南		107	ギンタカハマ
101	※ツタノハ科 オオツタノハ	紀伊以南	108	ダルマサラサバティ	奄美以南
	102	オオベッコウガサ	奄美以南	109	サラサバティ
103	※ミミガイ科 トコブシ	北海道南部以南	110	※アマオブネ科 イシダタミアマオブネ	九州南部以南
	104	フクトコブシ		四国以南	111
105	イボアナゴ	紀伊以南	112	※タマキビ科 ホソスジウズラタマキビ	紀伊以南
				113	※オニノツノ科 ハシナガツノブエ

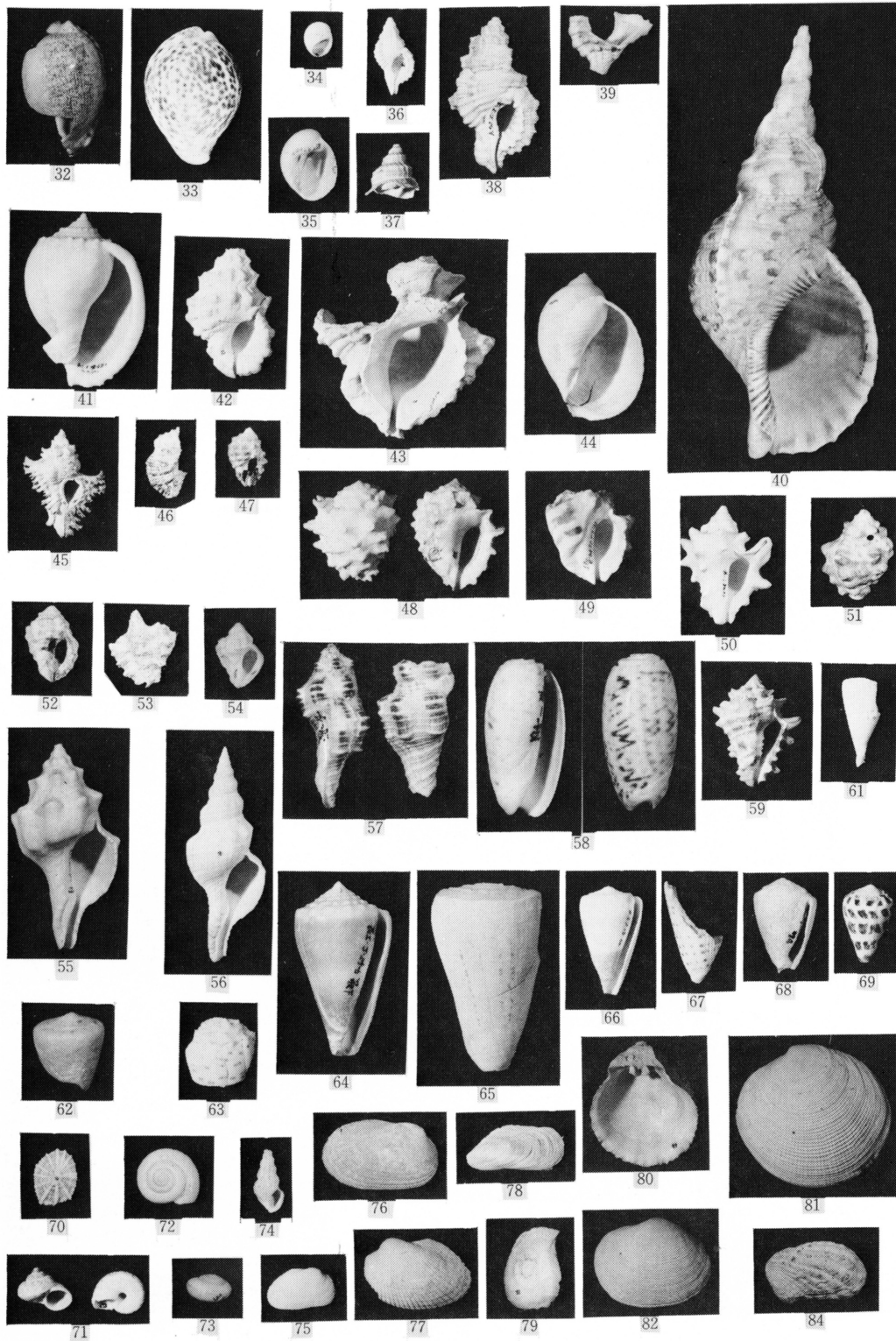
番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布	
114	カヤノミカニモリ	房総以南	133	※カブラガイ科 ヒトハサンゴヤドリ	紀伊以南	
115	オキノツノ	紀伊以南				
116	※スイショウガイ科 マガキガイ	房総以南	134	※エゾバイ科 ノシガイ	紀伊以南	
117	ヒダトリガイ	紀伊以南		135	シマベッコウバイ	紀伊以南
118	スイショウガイ	房総以南	136		※イトマキボラ科 イトマキボラ	四国以南
119	スイジガイ	紀伊以南		137	チトセボラ	伊豆以南
120	マイノソデ	四国以南			138	※フデガイ科 ニシキノキバフデ
121	クモガイ	紀伊以南		139		※マクラガイ科 ホソコモンマクラ
122	※タカラガイ科 ハナビラダカラ	房総以南	140		※イモガイ科 ニシキミナシ	四国以南
123	ヤクジマダカラ	房総以南		141	ハナイモ	奄美以南
124	ホシダカラ	紀伊以南	142		ヤナギシボリイモ	紀伊以南
125	ホシキスタ	房総以南		143	キヌカツギイモ	紀伊以南
126	※タマガイ科 ハウシュノタマ	房総以南	144		サヤガタイモ	房総以南
127	ユキネズミ	紀伊以南		145	マダライモ	紀伊以南
128	※フジツガイ科 シマイボボラ	四国以南	146		クロモドキ	奄美以南
129	ホラガイ	紀伊以南		147	※タケノコガイ科 カエンタケ	奄美以南
130	※オキニシ科 オキニシ	房総以南	148		キバタケ	奄美以南
131	※ヤツシロガイ科 ウズラガイ	房総以南		149	※カラマツガイ科 コウダカカラマツ	四国以南
132	※アクキガイ科 ホソスジテツボラ	四国以南			陸産	
133	シラクモガイ	九州南部以南		※ヤマタニシ科 オオシマヤマタニシ	奄美大島 徳之島	
134	コイワニシ	四国以南				

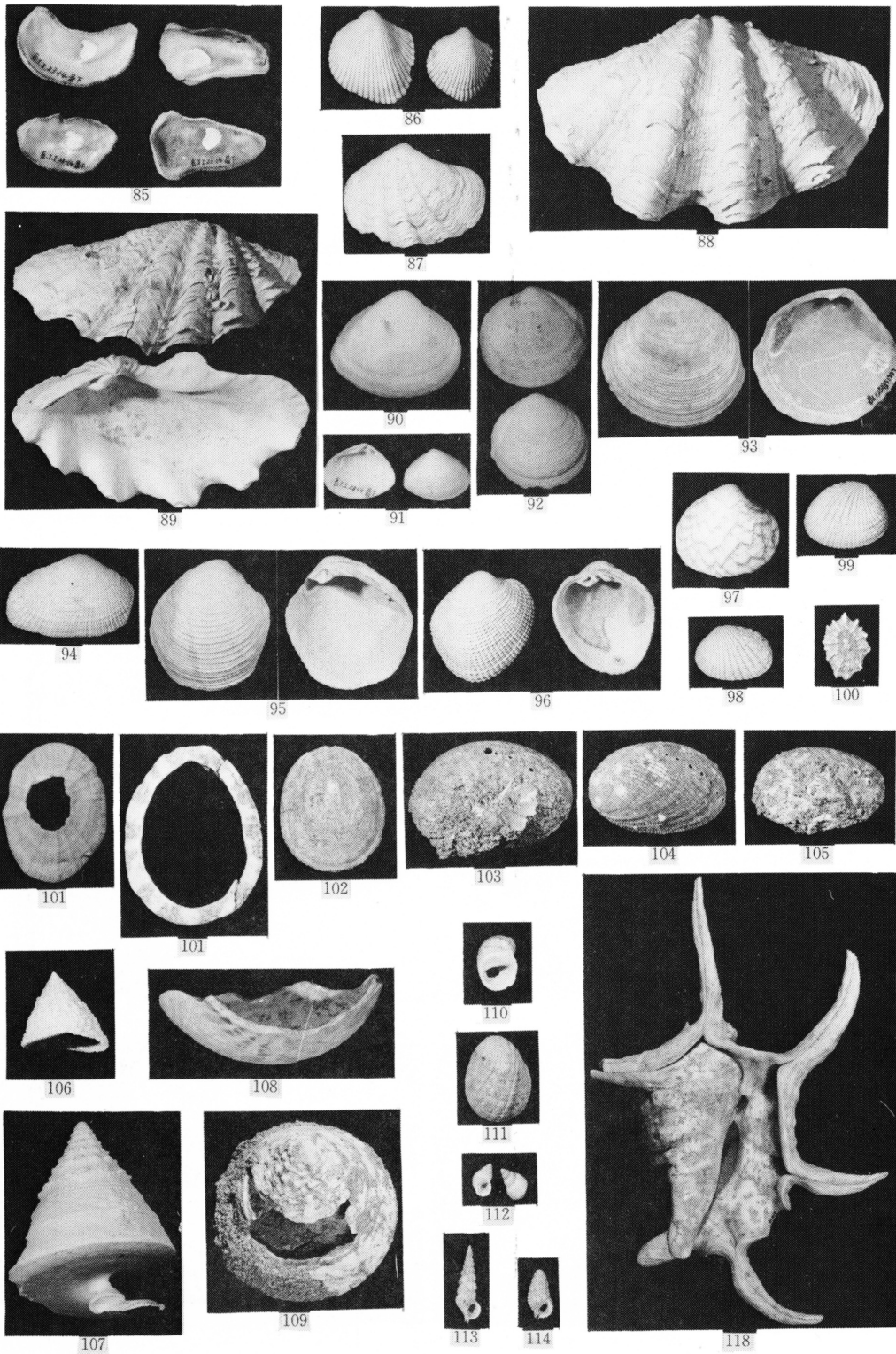
番号	和名(科名)	分布	番号	和名(科名)	分布
150	※オナジマイマイ科 オキナワウスカワマイマイ	奄美以南	165	※シャコガイ科 ヒレジャコ	奄美以南
151	オオシマケマイマイ	奄美大島	166	シラナミ	紀伊以南
	腹足綱 25科 57種				
	斧足綱 (二枚貝)		167	※バカガイ科 リュウキュウバカガイ	紀伊以南
152	※フネガイ科 オオタカノハ	紀伊以南	168	※チドリマスオ科 イソハマグリ	房総以南
153	エガイ	房総以南			
	ベニエガイ	房総以南			
155	リュウキュウサルボウ	奄美以南	169	※シオサザナミ科 リュウキュウマスオ マスオガイ	紀伊以南 奄美以南
156	※タマキガイ科 ソメワケグリ	九州南部以南	170	※マルスダレ科 ホソスジイナミガイ	紀伊以南
157	ウチワガイ	奄美以南	171	アラスジケマンガイ	奄美以南
			172	ウラジロチャイロサラサガイ オイノカガミ	奄美以南 房総以南
158	※イガイ科 ヒバリガイ	紀伊以南		汽 水 産	
159	※ウミギク科 ミヒカリメンガイ	四国以南	173	※ジジミ科 マングローブシジミ	奄美以南
160	※イタボガキ科 オハグロガキ	紀伊以南		斧足綱 14科 23種	
161	※ツキガイ科 ツキガイ	紀伊以南		第Ⅰ・第Ⅱ遺跡出土貝合計 〔 腹足綱 30科 95種 〕 〔 斧足綱 19科 31種 〕	
162	※キクザル科 ケイトウガイ	房総以南			
163	キクザル	津軽以南		※クダマキガイ科 シャジククダマキ	紀伊以南
164	※ザルガイ科 カワラガイ	四国以南			



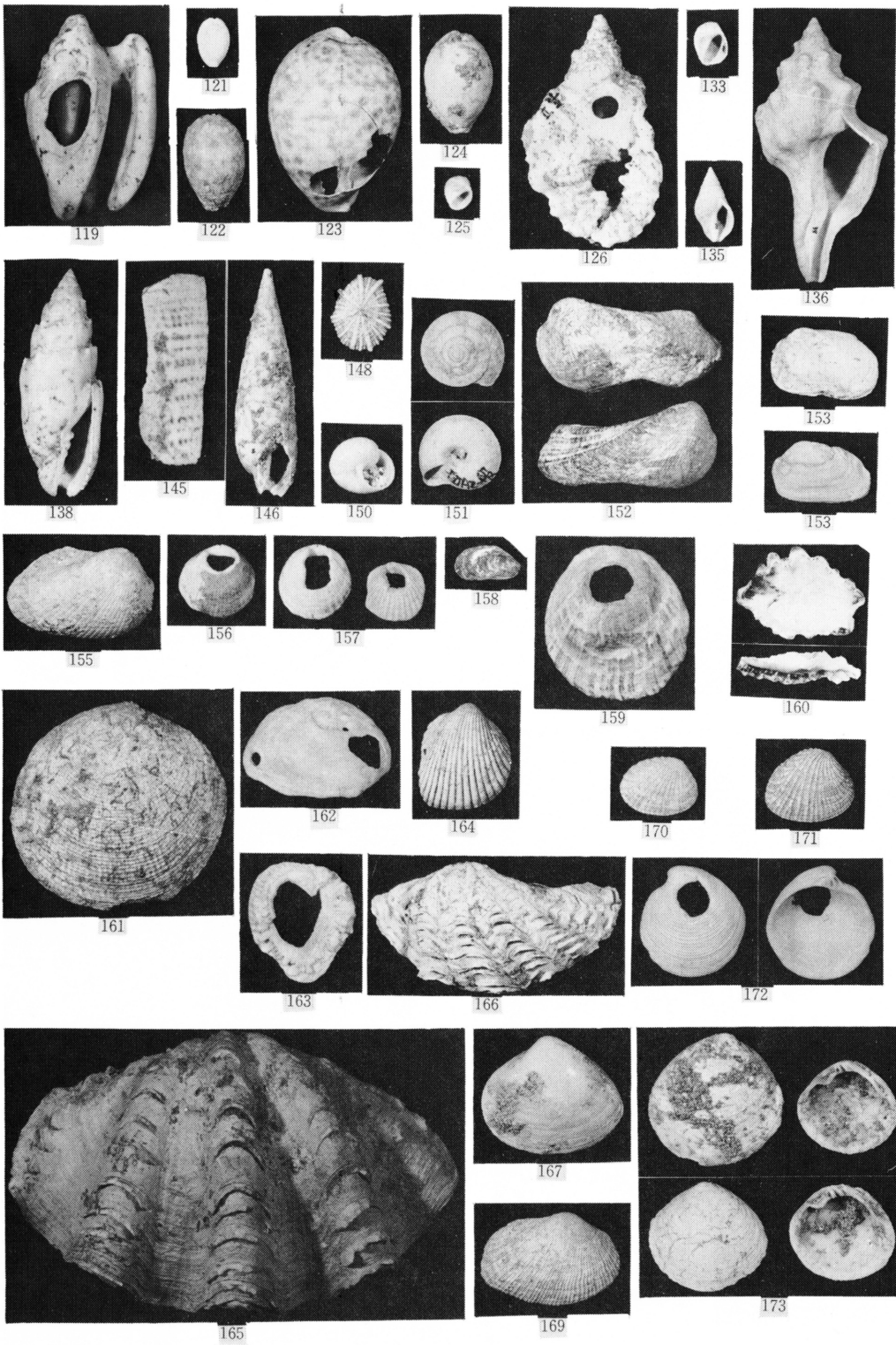


図版 2





图版 4



鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(32)

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財調査報告書

長 浜 金 久 遺 跡

発行日 昭和60年3月

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷所 中央印刷株式会社 〒892 鹿児島市春日町12番16号

## 長浜金久遺跡正誤表

P	行	誤	正
5	1, 38	編年図	→分類図
6	3, 4, 5	影	→景
	2 ~ 5	諸	→諸訳
	20	諸訳類	→諸訳
	33	諸訳 (I類)	→諸訳
7	15	教育庁	→教育長
13		0, 1, 2 m	→ 0, 100, 200m
14	25, 26	B.P.	→Y.B.P.
	26, 34	第7層	→第9層
15	1	第7層	→第9層
75	15	後	→跡
95	1	第54図第61図	→第64図第71図
	8	第61図	→第71図
133, 134		第II	→第III
135, 136		第II	→第I
139		嘉徳工式	→嘉徳I式
141, 142, 188		B.P.Y.	→Y.B.P.